

第6回誌上短歌大会 入選作品集

目次

ごあいさつ	2
選者紹介	4
大賞および特別賞受賞作品	6
選者選作品	8
足立 敏彦	8
内田 弘	10
大朝 暁子	12
押山千恵子	14
春日いづみ	16
月岡 道晴	18
時田 則雄	20
西勝 洋一	22
入選作品	24

本日ここに「NHK学園生涯学習フェスティバル第6回誌上短歌大会」作品集を発行させていただきます。日本歌人クラブとの共催は、昨年二月の松山でのイベント大会を合わせると六回をむかえることになりました。今回お寄せいただいた作品数は、自由題、題詠「道」あわせて二、六二四首にのびりました。お寄せいただいた短歌の一つ一つは、作者おひとりおひとりの心のうちに、この文芸が深く根を下ろしていることを教えてください。日々のくらしと経てきた人生経験を見つめ、短歌を通してみずからの言葉と心のあり方を探求されておられる方々がこんなにも多くいらつしやることを知り、心より感銘を受けております。

昭和五十八年に開設された短歌講座は、これまでの三十六年間に、三十三万人を超える方々が学んでこられました。この流れがさらに大きく豊かになっていくことを願い、短歌講座をはじめこのような大会や短歌学習の旅（スクーリング）など、教育文化事業の充実に、なお一層努めてまいりたいと思っております。多くの皆様のご参加とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

なお、大会大賞三作品は、各地で開催される大会の大賞作品とともに令和二年度の文部科学大臣賞候補作品となります。

最後になりましたが、大会の開催にあたり、選者の先生方、ご投稿いただいた皆様、ご協力をいただいた日本歌人クラブの皆様には厚く御礼申し上げます。

令和二年三月三日

ごあいさつ

日本歌人クラブ会長 三枝 昂 之

このたび「NHK学園第6回誌上短歌大会」をNHK学園と共催にて開催の運びとなりました。

第一回は三、〇八五首、第二回は三、〇五〇首、第三回は三、二〇二首、第四回は二、九六九首、第五回は二、三四三首。そして、今回は題詠「道」に一、二二一首、自由題に一、四一三首と多くのご投稿をいただきました。

日本も世界も、多くの困難を抱えている時代ですが、それ故に、四季のうつろいや生活の機微にふれる、日本の伝統文芸である短歌への関心も高まっています。

この大会がその魅力を再確認する場となることを心から念じております。

短歌は人々の暮しのなかの想いを託す詩型であり、一、四〇〇年の蓄積をもつ日本文化の背骨ともいえるべき詩型です。今後も皆様の温かい支えをお願いいたします。

最後に、本大会にご尽力を賜りました、NHK学園を始め、関係各位の皆様にご深く感謝申し上げますとともに、多くの作品の選にあられました選者の先生方に、心から御礼申し上げます。

本大会が皆様にとりまして、実りある交流の場となりますことをお祈りいたします。

令和二年三月三日

選者の総評・近詠一首

(選者は五十音順)

選者



足立 敏彦 (あだち としひこ)

昭和七年北海道生

「新墾」主宰、「潮音」選者

北海道歌人会顧問

夕張歌壇史編纂

内田 弘 (うちだ ひろし)

昭和十八年北海道生

「新アララギ」会員、「トワ・フルール」同人

日本歌人クラブ北海道ブロック長

歌集『街の音』

大朝 暁子 (おおあさ あきこ)

昭和十五年樺太生

「原始林」編集発行人

北海道歌人会幹事

歌集『夏服』『木根路』『辰砂の月』

押山千恵子 (おしやま ちえこ)

昭和十一年山梨県生

「未来」

北海道歌人会幹事、NHK学園短歌講座講師

歌集『真珠母雲』『シタール、響る』

応募の意欲が十分に伝わっている作品群を読めて嬉しかった。日常生活での出来事、人間関係、老境などの多くが前向きな人生観で詠まれているところに心が引かれた。しなやかな感性の相聞にも注目。総じて実感の生きた表現、情感を込めた韻律を好ましく感じた。

一本の道におのづと踏みてゐるけさの白銀ころを雪ぐ

熟年の人々の歌に対する熱い想いをひしひしと感じた。歌は具体を通して思いを結実させる、ということに心を砕いて欲しい。その中でも真摯に生活を見つめ一首に纏めている歌を見ると、頭が下がる。一途に歌に向かっている多くの歌に出逢う事が出来た。

臥しおれば階上の部屋に踏み音が響いて昼はただに怠惰

二六二四首を読み通して、自由題は歌材が多く感心した。ただ同じ古い、望郷、社会を詠んでも作者の意志が明確である歌は魅力がある。道の歌は、道路の他に農の道、老いの道、天道虫まであり楽しく学ばせて頂いた。解放感のある遊び心が今少し欲しいと思う。

唐突に己が不運を嘆くひとはるけき青春のある日のごとく

〈自由題〉〈題詠〉合わせて二六二四首という膨大な数の応募がされ、この度その選歌に関わらせて頂いた。全体に水準が高くすぐれた表現力によって日常の思いを述べられている。短歌の底力というべきものを感じました。皆様のますますのご健詠をお祈りしています。

満天星はこの道にも連なりて紅極まれり、緒方貞子逝く



春日いづみ（かすが いづみ）

昭和二十四年東京都生

「水鏡」代表、編集人

日本歌人クラブ中央幹事、NHK学園短歌講座講師

歌集『問答雲』『八月の耳』『塩の行進』



月岡 道晴（つきおか みちはる）

昭和五十年長野県生

「國學院大學北海道短大部句歌会」主宰

「トワ・フルール」同人

北海道歌人会事務局長
歌集『とりよろへ山河』



時田 則雄（ときた のりお）

昭和二十一年北海道生

表現者集団「劇場」代表

歌集『北方論』『凍土漂泊』『ポロシリ』他多数



西勝 洋一（にしかつ よういち）

昭和十七年北海道生

「短歌人」同人、「かぎろひ」代表

日本歌人クラブ北海道ブロック代表幹事
NHK学園短歌講座講師

歌集『未完の葡萄』『西勝洋一歌集』

一首一首と対話をしている気持ちになりました。短歌の詩型が心の器であることをしみじみ思う選歌の時間でした。情報社会にあって、発想や表現が画一的になりがちですが、それぞれ感覚を磨き、独自の視点を養い、作品に個性が出てくることを期待しています。

やはらかき母音捉へて両の耳まどかにひらく国際空港

題詠「道」の側ではおびただしい類想歌に苦しめられた。殊に多かったのが「人生の道」や「鍛錬道」といった用法で、この類の作には殆ど佳詠がなかった。題詠では発想か表現か、どちらかを新しいものにするよう心がけると、ぐっと入選の可能性が高まるだろう。

はらわたか肺かこころか身の洞をめぐらしたは降りてくるもの

応募作のほとんどは、平凡な日常に立脚して哀楽を掬いあげたものが多く、それらは深み、興行があり、じんわりと心に染みた。つまり、日常を詠うのではなく、日常から詠っているからなのだと思う。結局、どう詠うかではなく、どう生きているかなのだ。

空の中から櫓の鈴の音聞こえる手綱を引きてゐるのは父か

予想したより遥かに多い応募作品が集まり、嬉しい悲鳴をあげながら一首一首を読ませていただいた。力作が多い中、人生への思いが込められていて、しかも表現に工夫のある作品を中心に選ばせていただいたが、なお捨て難い作品を少なからず残す結果となった。

年月を重ね結びし絆さえほろほろ解け ゆく冬の道

全作品を名前を伏せて印刷し、全選者にそれぞれ入賞入選作品を選んでいただきました。大賞、特別賞は特選の中から選の重なりを考慮しつつ、NHK学園大会事務局で決定いたしました。入選作品欄は都道府県別に掲載いたしました。

NHK学園 第6回誌上短歌大会大賞

自由題

火色なき電磁調理器の一人鍋湯気のむこうにだあれもない

愛媛県 高橋 征子

くなしり
国後島を追はれし人の呼ぶ声か知床岬流氷が泣く

東京都 勇川 誓一

△題詠「道」▽

ひたすらに大工の道を歩み来て八十路ひとりで足場組み終ふ

福井県

児玉普定

日本歌人クラブ賞

十歳の孫の目の行く本棚にエリ・ヴィーゼルの『夜』を並べぬ

神奈川県

桐生春江

足立 敏彦 選

★特選

食洗機の音ざわざわとする夜ふけ君のLINE
Eのあをき点滅

高知県 依光 ゆかり

遅い食後の片付けが済んで一段落した時間。そこを見計らったように「君のLINE」である。しんとした「夜ふけ」ではない。その背景は分からないから想像を呼ぶ。日常感覚のはたらいた相聞歌。

亡き父の傘を開けばすつぽりと身のをさまり
て雨音すがし

熊本県 伊藤 裕子

大きなこうもり傘である。 「亡き父」の広い深い懐を慕う心が余すことなく詠まれている。「すつぽりと」という直截な修飾語で、その気分、姿が表され、「雨音すがし」をかけがえのない結句にした。

題詠「道」

入口と出口の違ふ駐車場来た道戻れぬ人生の
如し

埼玉県 武井 猛

「道」という題をしつかりと意識したうえで発想である。「駐車場」の「入口」と「出口」の通路はその同じ所を戻れない。当たり前前のごとくに心をはたらかせて、うまく人生行路の真理に触れた。

★秀作

倒れてもなほ満開の花つけて大地震あとの蝦夷山桜 北海道 泉 玄冬

木洩れ日のテラス席なら取つてあるしなやかに吹く風になりたい 青森 佐々木絵理子

こぼるればこぼるるほどのさみしさよ夕べの風に撓む萩群 福島 石井 弘子

除染土の置き場を囲う壁の絵は大きな虹と鳩の群れなり 福島 霜山ミエ子

遠浅の海まで駆けた浜は無くテトラポッドに波打ち寄せる 千葉 川口由美子

香港のデモの若人撃たれしを悼みて赤き新月うかぶ 神奈川 小林 敬子

風花はくの字への字で下りてくる天からの手紙そつと手に受く 新潟 木ノ瀬厚子

七歳が祖父母両親従えて千歳館持ち玉砂利を踏む 愛知 井戸田雅子

幾重にもかさなり合ひし狐絵馬風の吹くたびコンコンとなく 京都 近藤 好廣

哲学にあらず宗教にもあらず吾を支へるこの爪楊枝 兵庫 濱 守

火花なき電磁調理器の一人鍋湯気のむこうにだあれもない 愛媛 高橋 征子

二度三度くるま椅子の輪を前後させ児は石塊をのりこえにけり 大分 山崎美智子

題詠「道」

村道の拡幅工事の区域内いづれ伐らるる梅まつ盛り 群馬 浦野美代子

道具持ち手に馴染んだと人は言う同じことかな手が馴染んだと 神奈川 笠原 隆司

いくつものことば呑み込み会の果てあみだくじのごとく道帰る 岐阜 川出香世子

救急車に道を譲りておもむろに動き始める真昼の四つ角 静岡 杉本 弘子

ヘルメットの人ら退く昼休み掘られし道路の柵の中のぞく 静岡 飯田俊文子

道祖神前に無人の売り場あり百円玉にて柿ひとつ買う 愛知 笠井 忠政

独りごと言ひつつ歩む人ありて追ひこせずある桜散る道 愛知 羽生由紀子

カーナビに新しき町はまだなくて海ばかりなりその道を行く 山口 石井久美子

★佳作

湖と海 <small>うみ</small> の間の砂嘴 <small>あわい</small> に湧く真水 <small>まみづ</small> 含めり水の星の賜物	北海道	山本美智栄
夫がよく孫と遊びし公園の木蔭深きに自転車を寄す	茨城	遠山 順子
藍瓶の並ぶ工房見て出づる五月の空は水浅葱色	栃木	保母 富絵
屋号もて呼び合う古き町並のわが家は種子屋隣は下駄屋	栃木	箕輪 イセ
妖怪画笑って見ていた幼子がトイレに行くをためらう冬の夜	群馬	本川ミヤ子
古文書の一字が読めた嬉しさに辞書を片手に夜の更けるまで	群馬	細川のぶ子
生きるつて年を経ること逝く日まで体内時計人はもちおり	埼玉	戸田美乃里
一列目に並べなくても二列目で自分の道を生きるのもよいか	埼玉	森 久子
クラス会次回は少し遠くでと言った君の計報を聞けり	東京	本橋 正明
いつからか君のたよりを待ちあぐむ身を知る雨の静かなりけり	東京	青木 順子
七十路は開き直りて生きむとぞ夜明けのコーヒー一氣に飲み干す	東京	西川 芳子
晩酌は湯呑み一杯とこの宵も足らふ笑顔や卒寿の夫は	東京	小池 雪子
病原菌はびこるやうに文明は火を起こす民にスマホ持たせる	長野	後沢 恒子
百超ゆる灌漑用水の栓締めて今年最後の仕事終へたり	長野	中野 寛人
わが背 <small>せな</small> を忘るるなかれと戯れに転校の子を門まで負ひき	愛知	嶋田 稔
増税はなぜこの時期かと思いつつ味酩一びんカートに入れる	愛知	江崎ヤヨヒ
脳腫瘍の手術を受けし少年が駅のピアノで「未来」を弾けり	京都	長尾 律子
自由といふ孤独なものがあるために夜の巷 <small>ちまた</small> を去ることできず	京都	長倉 美季
四時五時を分け合いながら漆黒の闇へと続く冬の夕暮れ	大阪	吉井並紀子
世の中が悲痛な声を上げているまるでムンクの「叫び」のように	奈良	勝山小次郎

題詠「道」

大らかに人らの笑う声すなり土手の傾りに咲く曼珠沙華	和歌山	菅原 清美
ランニング一枚で過 <small>ひとつ</small> こす今日秋分ひがん花咲かぬを忘れそうなり	鳥根	田中 勝美
風のなか暗証番号教えてとささやき聞こゆ白曼珠沙華	鳥根	田中 勝美
大根も人參ももう作れない二人は老いてコスモス揺れる	香川	庄司ハナ子
—— 題詠「道」 ——		
北海と書いて道に○をするルール分からぬラグビー見つ	北海道	後藤 明美
道ばたのえのころ草も枯れにけり踏まれもせずには抜かれもせず	岩手	小野寺左安子
うら若き修道女らに出会ひける好文木花薫る園にて	茨城	加藤憲一郎
道祖神すこしずらして若者は電気工事の梯子をかける	栃木	茂呂田 誠
農道へ抜けゆく風に葉は揺られて白首みせる遅蒔き大根	埼玉	松本 和子
それぞれの歩幅に夫との散歩道目指すは何時もの木蔭のベンチ	東京	小池 雪子
まるまると月差し昇り廃坑の赤く錆びたる鉄路を照らす	東京	吉田 能明
誰かれの言葉楽しく聞く日なり黄菊白菊香る道辺に	神奈川	桐生 春江
点滅をするに渡りて来たるわれ死出の道をもかく急げるや	静岡	後藤 瑞義
引きこもる生徒に会はず月光に背を押されて夜道を帰り来	愛知	嶋田 稔
道産子は冬の間はマイナスをつけず「今夜は十二度」と言う	愛知	高橋みどり
渋滞を避けてハンドル右にきる彼岸花咲く廻り道あり	愛知	山田 妙子
別れ際のあなたの言葉淋しくて空しく歩く駅への道を	兵庫	西村 紀子
吾のみの通る道なり人生の黄昏時をさ迷っている	和歌山	池田美佐子
一夜いて母の里から帰る道 宵待草はみんな萎んで	岡山	岡田 耕平

内田 弘 選

★特選

国くなしり後島を追はれし人の呼ぶ声か知床岬流水が
泣く

東京都 勇 川 誓 一

国後を追われて久しい。戻ることなく逝った人々の声
が今でも岬に響いているようだ。毎年寄せてくる流水の
音は、まるで古里を恋う泣き声の様に聞こえる。北方領
土を思う人の声を詠い上げた秀歌だ。

助手席の角度が少し違ってる彼と私に妙なす
きま風

埼玉県 森 健 二

恋人との微妙な距離感を詠って優れた歌である。「助
手席の角度」の違いを詠い、彼との間に出来た「すきま
風」を詠った。微妙な恋愛感情をさりげない角度に切り
取った手法は巧みである。

柿赤く夕日に染まる村の道百舌の一声響く静
けさ

石川県 池 本 青山

印象が鮮明な歌である。柿の実が熟れて来た。そんな
柿の実が夕日に染まっている村の道に百舌が鳴いてい
る。どこか懐かしい風景を実に巧く取り込んだ秀歌だ。
静寂な中に百舌が鳴く村が印象深い。

★秀作

ポロトから春が目覚める白老は踊る女性メノコの歡喜にあふる
倒れてもなほ満開の花つけて大地震あとの蝦夷山桜
北海道 山本 信雄

秋暮れのすすき穂ゆらし下校児の田んぼ道ゆく元氣の笑顔
宮城 及川 綾子

夫の死も知らず無心にプリンを食む母は施設のベッドの上で
栃木 塩沢かつ子

白杖の少年が吹くオカリナの「ふるさと」冬の雲に乗りゆく
東京 久保 親二

七十路は開き直りて生きむとぞ夜明けのコーヒー一氣に飲み干す
東京 西川 芳子

百超ゆる灌溉用水の栓締めて今年最後の仕事終へたり
長野 中野 寛人

椿の実けはしく裂けて落ちにけり通夜の路辺に数多見つけたり
愛知 甲村サカエ

腹割かれ縛られ梁に吊されし塩引鮭せんびや千尾圧巻
兵庫 佐保田全弘

アフガンに医師の築きし水路民を救いし水流れいく
兵庫 尾上とも子

帰ろうかツルメモドキの実も弾せて今度は私が待つてあける
福岡 融 子

市庁舎の四階の窓あのあたり父を偲びて食むオムライス
大阪 平野 隆子

—— 題詠「道」 ——
しやがみ込みじつと視ているランドセル蟻のかたまり蛾を引きてゆく
群馬 山下美津子

この道は子らと来た道散歩みち春を待ちつつデイケアへ行く
千葉 後藤 親子

別れ道君は左に僕は右桜散る道ビル並ぶ道
神奈川 渡辺 勲

方位感失くし地下道に澱みおるすべてのものが行き去るばかり
神奈川 松田 洋子

たんぼの花咲く初夏の通う道みんな元氣で朝の登校
長野 山岸千世子

引きこもる生徒に会へず月光に背を押されて夜道を帰り来
愛知 嶋田 稔

アフガンに水の流るる道つけし医師撃たれたりそのアフガンに
愛媛 前田 充

板塀に白杖当てつつ道なりに駅まで兎は歩みゆくべし
大分 山崎美智子

★佳作

寒空に重機のアームゆつくりと橋の架け替へ工事は進む
 低くこつを訊かざりしまま父親の遺しし砥石に今日も鎌低く
 一輪車押しゆく我に先立ちて数多の蝗音たてて飛ぶ
 帰りたき願ひ叶わず施設にて息引き取りし父を迎えぬ
 路線バスの消えて佗しとうこの村もまばゆき程に稲穂が稔る
 新年の欠礼葉書すりながら消されゆくらむ夫の名おもふ
 背を丸め吾の手枕に眠る君白き裸身にもゆる爪紅
 ふる里のなまり溢れる列車内行商たちの完売の声
 冬の日の深く差し入る八畳間檜の葉の影昼にゆるる
 台風後ブルーシートの町となる追いつち掛ける台風近い
 白木蓮咲きて明るき特養ホーム入りくる日差しに夫は居眠る
 一点をじつと見据えて振り下ろす杭打つ人の軸は揺るがず
 三ヶ日の蜜柑畑に佇めばオレンジ色の風が過ぎ行く
 過疎の里いでし人らの掛時計そば屋の壁に同じ時を打つ
 一日の介護も無くて母逝きし握り返さぬ手はまだ温し
 メモ用紙窓に挟みて帰り来ぬ会えずじまいは無念と書いて
 手になじむ鋏を杖とし畦に佇ち久にして聞く入相の鐘
 蠟梅の枝に下されるみの虫に雨降りつる風吹きつける
 四つあるブランコ全て手で揺らし真顔のままにあの子は帰る
 大根も人参ももう作れない二人は老いてコスモス揺れる

青森 赤沼 淑子
 山形 村上 秀夫
 福島 相楽 智富
 栃木 塩沢かつ子
 栃木 箕輪 イセ
 群馬 松下 昭代
 埼玉 森 健二
 千葉 葛岡 昭男
 千葉 岩崎 勝
 東京 宮城 六郷
 東京 関根ミサ子
 東京 栗田よしを
 神奈川 渡辺 勲
 愛知 高山多津子
 愛知 原田 照恵
 大阪 新 恵子
 和歌山 奥田 房子
 岡山 一柳いくみ
 広島 向井 好美
 香川 庄司ハナ子

火色なき電磁調理器の一人鍋湯気のむこうにだあれもない
 食洗機の音ざわざわとする夜ふけ君のLINEのあをき点滅
 甘柿も渋も熟柿と仰ぐ空亡き母めでしくれなるの棘

題詠「道」

道の上一番星に祈りたるアラート鳴らぬ平和下さい
 曲つても曲つても霧に包まれて浮遊することし碁盤の目の街
 売る人も客も明るしみちのくの訛り華やく盆の道の駅
 台風がさらった後の朝の道電柱のビラ僅かに残る
 農道へ抜けゆく風に葉は揺れて白首みせる遅蒔き大根
 寄り添って歩くことなどなく老いて妻の手を引く通院の道
 春の夜の野道を一人ちどりあし月も酔ふたかぐらりと揺るる
 まろまると月差し昇り廃坑の赤く錆びたる鉄路を照らす
 駅までのいつもの道がキャンバスに今日の紅葉は今日だけの色
 鈍行を降りて佇む無人駅道行く人の訛の聞こゆ
 道に迷い屋台をくぐる老いふたり熱燭一本あつ揚げ二つ
 身も軽く電柱登る作業員七つ道具を腰にぶらさげ
 八度目の手術に向ふ夫なれば言葉少なくて付添ひてゆく
 岩盤に轍の深し港へと葡萄酒樽の運ばれし道
 道の辺に瓦礫の残骸捨て置かれ土掘る重機終日動く

愛媛 高橋 征子
 高知 依光ゆかり
 福岡 藤村 義治
 北海道 高本 智宏
 青森 小山田信子
 宮城 武藤 敏子
 栃木 染宮 千美
 埼玉 松本 和子
 千葉 春原 由治
 千葉 高伸 一郎
 東京 吉田 能明
 東京 徳田 知也
 富山 池田 正男
 福井 永田 弘子
 山梨 渡辺さちえ
 愛知 河合 佳代
 兵庫 齋藤恵美子
 広島 小白 照子

大朝 暁子 選

★特選

追憶のもつとも美しきは昏睡の母のまなじり
流れし涙

岡山県 宮本 加代子

「追憶のもつとも美しきは」のインパクトのある詠い出しが、昏睡の母の涙であるという事に納得する。その都度、こころ揺さぶられるであろう作者の追憶が、流麗な一首に結実した事を喜びたい。

はつ恋の君がジイジと呼ばれおり駆けつこの
速い少年だった

栃木県 福田 樹生里

ジイジと呼ばれるはつ恋の相手。自分の上にも相手の上にも流れていった長い年月をしみじみと伝える。語られていない沢山の事を内包しているだろう。「駆けつこの速い少年だった」が秀逸。

題詠「道」

天動説信じたきかなのつしのつしと朝陽が山
を乗り越えて来る

愛知県 三好 ゆふ

山の向こうから昇ってくる太陽を描く。天動説を信じたい、という出だしがいい。もちろん、のつしのつしも効いている。迫力満点の太陽だが恐れはなく、むしろ親近感をもって温かく詠んでいる。

★秀作

不登校じゃない非登校 行きたくて行けない気分分かっていない
温かくややくいかいなる血の絆林檎のやうにさつくり切れず
裏口を出てゆく楳目で追ひて普段どほりの施設の食堂

山腹に雲を脱ぎ捨て赤城山長き裳裾の秋うららけし

ブラウスの釦を舐めている母の掌にのせる赤いドロップ

電動の自転車に軽く坂越えて老人我は少年になる

しくじった写生に見える雲たちを空いっばいに描く大自然

山の田の脱穀終わり山下のお疲れさまの案山子も担ぎ

「ひらがなに恋をしました」吾が母語を学ぶ女性笑む南半球

黄金の海なす平野をはしりゆく郵便局の「はたらくくるま」

一日の介護も無くて母逝きし握り返さぬ手はまだ温し

コーランを開き祈れる四畳半小さき絨緞斜めに敷かれ

題詠「道」

国敗れ祖国への道断たれたり飢えて二冬耐へにき大連

「部活行く？」自転車通の声聞こゆあの子らの青春より低い

夕闇につつまきれない北海道真白きそばの花盛りなり

犬山の光葉重なる初夏の道笑いが先に丘駆け上がる

スタックカートにかかとの音するくんだり道今宵イブなり駅はもうすぐ

相合傘濡れているのが惚れたほうちよつと冷たい駅までの道

たくさんの笑顔に出会う道があることがあなたのふるさとなのね

水霜に残りあじさい色増して読経聞こゆる朝の寺道

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|
| 青森 | 森内 勇治 | 青森 | 足立 幸恵 | 北海道 | 川口由美子 | 千葉 | 笠井 忠政 | 愛知 | 原田 熙恵 | 愛知 | 井川 尚己 | 愛知 | 藤掛 宏子 | 静岡 | 佐藤 一央 | 長野 | 市川 光男 | 東京 | 丹羽 敏彦 | 埼玉 | 鈴木 興山 | 群馬 | 山下美津子 | 群馬 | 石坂ふさ子 | 群馬 | 横山 房子 | 青森 | 大野あつ子 |
| 岡山 | 小橋 辰矢 | 和歌山 | 中尾 加代 | 兵庫 | 金田 益美 | 滋賀 | 田中 新一 | 埼玉 | 平塚萬亀子 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

★佳作

スカートの裾をパンツにキュと挟み逆上がりしたたんぽぽ公園
 若き日に設計をせる橋の下くぐって今日は病院へと行く
 屋号もて呼び合う古き町並のわが家は種子屋隣は下駄屋
 凍てし朝のはつかかな風に触れ合ひて樹水は万のトライアングル
 新年の欠礼葉書すりながら消されゆくらむ夫の名おもふ
 暗闇に紅蓮の炎ふきあげて為す術もなく首里城崩れ
 くらやみにストレッチする登山口下弦の月が笑っているよ
 『初恋』を買い求めたり中一の春赤き表紙がまぶしく映えて
 ふる里のなまり溢れる列車内行商たちの完売の声
 目に染みる鮮やかな夕焼けだなあ離れた土地で父の死を聞く
 炭焼きの自慢話で飲む人も居なくなつたな令和の酒場
 一点をじつと見据えて振り下ろす杭打つ人の軸は揺るがず
 亡くなつてからようやく愛せる人もいる遅いけれども遅すぎではない
 この山に流し汗を忘れまじ真つ赤な炭を掻き出す父の
 われ君に尽くすこと嫌ではなきが君の所有物には断じてならぬ
 ゴーヤの蔓にとられし干し竿の隅をお借りしわがシャツを干す
 百超ゆる灌漑用水の栓締めて今年最後の仕事終へたり
 坪庭に今年も訪ひ来て晴やかに暫し宿るはひかりの旅人
 悲しみを握つてはならべていたんだね母を亡くした児の砂あそび
 事あらば「冥土のみやげにする」と言う百二歳の母の荷は増しゆかん

北海道 後藤 明美
 北海道 勝俣 征也
 栃木 箕輪 イセ
 群馬 眞庭 義夫
 群馬 松下 昭代
 埼玉 寺沢 文字
 埼玉 栗原 弘雄
 埼玉 安東 彰義
 千葉 葛岡 昭男
 東京 丹羽 敏彦
 東京 田倉 栄
 東京 栗田よしを
 神奈川 河野 真理
 新潟 折居 伸
 富山 山中美智子
 山梨 雨宮 清子
 長野 中野 寛人
 岐阜 松尾 東一
 愛知 藤掛 宏子
 愛知 中村佐世子

持病ゆえ一生服用して下さい易易「いっしょう」と言ってくるな
 彼の日から明かりの消えし友の部屋まどに仄かな梅雨のゆふやけ
 ぼこぼこことまるい茶色の集まりがぱつと飛び散りすずめとなりぬ
 沖繩の一家総出の甘蔗倒し葉殻の上の昼餼楽しむ

題詠「道」

十一歳の下駄に通学せしわれが蘇るこの坂道駆れば
 生徒会選挙に落ちて取りもどす一本の道受験直進
 キャンパスに夜の帳の下りる頃夜学校舎の道に灯の漏る
 晩秋の光の撓む木下道先ゆく人は柘榴を下げて
 分校へ通いし山道訪えば昔のままの秋の景あり
 道に迷い屋台をぐるる老いふたり熱燗一本あつ揚げ二つ
 あさがほのたねの中にも道があり水が通るとほくは信じた
 引きこもる生徒に会はず月光に背を押されて夜道を帰り来
 道産子は冬の間はマイナスをつけず「今夜は十二度」と言う
 ふる里の道路はもつと広かった地球がいつしか縮んだのかな
 岩盤に轍の深し港へと葡萄酒樽の運ばれし道
 この緑この風が好き故郷の青田の道に深呼吸する
 旅行はもう無理だらうと言はれた日道路地図買ふ日本全土の

和歌山 山田 則子
 和歌山 木村いく子
 広島 田中伯見子
 沖繩 多良間典男
 青森 大野あつ子
 茨城 稲葉 秀子
 神奈川 鈴木 経彦
 神奈川 金子 裕子
 富山 源通ゆきみ
 福井 永田 弘子
 岐阜 三田村広隆
 愛知 嶋田 稔
 愛知 高橋みどり
 大阪 金子 公有
 兵庫 齋藤恵美子
 愛媛 井上由美子
 福岡 融 子

押山千恵子 選

★特選

路線バスの消えてゆしとうこの村もまばゆき程に稲穂が稔る

栃木県 箕輪 イセ

都市部に人口が集中し、生産の拠点である地方の過疎化が進んでから半世紀余り。上句の「消えた路線バス」に静かな怒りをこめつつ、下句の「稲穂の稔りのまばゆさ」に、作者の渾身の賛辞がこもる。

身の丈が百八十五の長男の小さくなりし遺骨を抱く

熊本県 岩城 恵美子

身の丈百八十五、屈強の包容力ある青年の姿が浮かぶ。感傷をすべて削ぎ落とした一首全体の表現の奥に、深い悲しみがある。「小さくなりし遺骨」に、両親の許に帰った子息の魂もこもっているよう。

題詠「道」

ひたすらに大工の道を歩み来て八十路ひとり
で足場組み終ふ

福井県 児玉 普定

建築に携わる人々はそれぞれに独立した精神で仕事をされているのだろう。率直な表現から伝わる技術と心の動きが心地よい作である。「八十路ひとり」も、またさりげない「ア音」の多用もよい。

★秀作

「では またね」米寿の姉の手紙にはリボンで結ぶごとき末文
ふと風に翼広げて去るように友は逝きたり深緑の明け
救急のドクターへりに移送され命つなぎし夫よもう冬
夫がよく孫と遊びし公園の木蔭深きに自転車を寄す
山肌は大蛇のごとき根を曝し大杉は立つ豪雨の後も
赤子背負い野花つみつつ児のわれは畑より帰る母待ち侘びき
新米は手に柔らかし米作り止めたる兄の秋を思いぬ
癌告知後書きしノートを読み返し処分するなり十年経ちて
独り居の老人狙う電話だな切るべきなんだが声が可愛い
また来年花が咲くさと言ふ人の視線に白き冠水林檎
悲しみは心にしまひ母の顔子の病室を笑顔で見舞ふ
二度三度くるま椅子の輪を前後させ児は石塊をのりこえにけり

題詠「道」

亡き夫と息子の車椅子を押して来し車輪のひびき甦るなり
団栗を探す番の栗鼠出でてひよっこりひよっこり林道登る
寄り添って歩み来たり十二年ゴールデンレトリバー今息絶ゆる
東海道蒲原の宿に嫁ぎたる姉を慕ひて妹三人訪ふ
母の愛父の愛とも知らぬまま育ちし友も己が道へと
この吾を学問の道へ押しくれし読み書きおぼろな漁師の父は
病める身に小さき灯り点すごと今朝も道路を掃き清めをり
この道は子らと来た道散歩みち春を待ちつつデイケアへ行く

- | | | |
|-----|-------|----|
| 岩手 | 長野 | 倫子 |
| 岩手 | 長野 | 倫子 |
| 山形 | 松田たつ子 | |
| 茨城 | 遠山 順子 | |
| 栃木 | 五十部澄子 | |
| 東京 | 町田 サチ | |
| 神奈川 | 富樫 高子 | |
| 長野 | 宮坂美恵子 | |
| 滋賀 | 田中 新一 | |
| 兵庫 | 高田 時子 | |
| 岡山 | 辻岡 幸子 | |
| 大分 | 山崎美智子 | |
| 神奈川 | 清水 怜子 | |
| 神奈川 | 綿貫 昭三 | |
| 岐阜 | 細井 迪子 | |
| 静岡 | 友井七実子 | |
| 和歌山 | 立川 寛智 | |
| 鹿児島 | 大島 安徳 | |
| 鹿児島 | 大島 安徳 | |
| 千葉 | 後藤 親子 | |

★佳作

かつて義父の耕したる土地訪ひたれば新規就農の子の声ひびく
冬閉ひ終りてほつとたたずめば暮れゆく庭に石路の花
大らかな「なんくるないさ」を切札に励みし農の出口なき日も
改札のボタン押し出る廃線駅通学定期の最後の日付
待つ夫の淋しげな顔を思い出し声聞くための携帯を握る
残り火の僅かになった(町の)という菓子屋魚屋八百屋とうふ屋
(米博士)君ならなれると師の教え十五歳の春に農人となる
日の出拝み船出の漁師ら老いたるに跡継ぎはなく村寂れゆく
お試しのデイサービスに夫送り空気の抜けた風船となる
秋真昼蕎麦打つ友の手際よさ箆に盛らるる光をすすする
娘と並び遠空見上ぐる夕端居銃をかつきし母を語りき
倒木の桜の枝にあわく咲く長月みそか命の限り
補助輪のなき自転車軽快さ覚えし幼肩で風切る
炭焼きの自慢話で飲む人も居なくなつたな令和の酒場
轟音の闇のなかより流れくる牛馬鳴く声助けての声
悲しみを握つてはならべていたんだね母を亡くした児の砂あそび
刈り取りを終えし山田に立つ案山子破れ帽子をななめにかぶる
甘えつ子ワンちゃん一昨日亡くなつた夫婦二人のお家になつた
麦焦がす工場の在り処は見えねども入りたる町の息吹きのごとき
胸内を知ること笑みます御仏に小さく小さくなりてわれ坐す

北海道 菅野 礼子
北海道 中村てるよ
北海道 筒井 淑子
北海道 田辺 昭信
北海道 高井 瑞枝
宮城 奥津百合子
山形 高橋 正幸
福島 鐵 マサ子
群馬 田村 敏枝
埼玉 仲野 重子
千葉 斎藤 愛子
千葉 坂口とし子
千葉 春原 由治
東京 田倉 栄
静岡 後藤 瑞義
愛知 藤掛 宏子
愛知 山本 恵子
滋賀 田中 新一
岡山 竹本 正
山口 吉村 京子

題詠「道」

火色なき電磁調理器の一人鍋湯気のむこうにだあれもない
白菜をさくさく刻むこともなく施設の馳走が味となる
是非もなく去りしわが家は解かれたり五橋浮かびて夕日は海に
昏れそめてはじめるひとりの夕支度気楽さありて少し寂しき
二百グラムの胎児の火葬に見る心縫い針ほどの骨がいくつか

枝打ちに下草刈りにと半世紀林業の道父は貫く
和宮の行列も通りけむ琵琶峠路は苔むしてをり
夫の居し最期の室の見える道今日やと通る三年過ぎて
吹く風に道あるごとし病窓の手前と奥の雲の行き交ふ
人気なき落葉の道を「カサコン」と音を散らして雀あそべり
つなぐ手を初めて握り返す君新学期の朝この通学路
痛ましい筋道明かす愛弟子の死を知らせくる望月の夜に
山茶花の咲く小道見ゆいつの日か曲がりて見むと思ひて十年
道祖神前に無人の売り場あり百円玉にて柿ひとつ買う
帰り道八億キロの道程を(はやぶさ)二号地球にむかう
吾は農婦癌の臍臓切り捨てて生有る限り我が道を行く
天職とひたすら歩むこの道を継ぐと言う子と仰ぐ虹空
子を産めぬ若牛のせてトラックは秋の彼岸の山道に消えぬ
明けやらぬ山道くだるトラックは俯く廃牛一頭乗せて

愛媛 高橋 征子
福岡 長尾 之子
熊本 田辺しげ子
熊本 香月 郁代
熊本 益田 節子
栃木 関本 ナラ
埼玉 栗原 弘雄
千葉 菅井 昌子
東京 西川 芳子
神奈川 大竹 睦美
岐阜 青木 奈緒
岐阜 村上やす子
愛知 三好 ゆふ
愛知 笠井 忠政
愛知 伊藤 忠男
京都 吉村 明美
兵庫 大井 順子
長崎 長谷智香江
長崎 長谷智香江

春日いづみ選

★特選

冬の夜に尿をしつつ父確しかと北さす星を教えく
れたり

長野県 宮下 重美

星がひときわ輝く冬の夜、父と息子ならではの光景が鮮やかに詠まれている。「北さす星」つまり北極星は方角を知るだけではなく、父の声や話と共に作者の人生の指針となったのではないだろうか。

幾重にもかさなり合ひし狐絵馬風の吹くたび
コンコンとなく

京都府 近藤 好廣

絵馬の多さが上句によく描写されている。人々の願いの量だ。風に絵馬がぶつかり合う音を「コンコンとなく」と詠い、あたかも狐が願いを叶えてあげようと言っているよう。狐絵馬ならではの機知。

題詠「道」

息子としゆく手続きのひとつひとつかな特別
養子縁組みへの道

北海道 渡部 愛

作者が既に「息子」として育んでいる存在であっても、養子縁組み成立には手続きを重ねなければならぬ。焦らず、真摯に向き合う姿が感じられる。「道」に深い思慮と愛に満ちた時間が流れている。

★秀作

働く時はシルバー人材と呼ばれても事故を起こせば高齢者となる
秋真昼蕎麦打つ友の手際よさ箆に盛らるる光をすする
己から入りたる糞を出でんとし一日がをはる夕焼けに亀

福島 松浦 恭子
埼玉 仲野 重子
千葉 高伸 一郎

優先の席に駆け込みさりげなく帽子を取りて光頭を見す
十歳の孫の目の行く本棚にエリ・ヴィーゼルの『夜』を並べぬ
亡き母のテレフォンカード一枚が癌のページに眠りてをりぬ

千葉 石澤 廣太
神奈川 桐生 春江
長野 新村 亮三

悲しみを握つてはならべていたんだね母を亡くした児の砂あそび
茜さす朝の光に照らされて亡き母のごと若水を汲む
華のなき我が家が吾子の連れて来し乙女の名前さくらと言えり

愛知 藤掛 宏子
愛知 近藤輝久江
広島 向井 好美

色あはく美しとおもふ木槿背に文大統領は「あらそふ」と宣ぶ
W杯過ぎたる街になほ靡く外国旗ひもに絡まるもあり
太ぶとと農に鍛えし妻の掌が細き紬の糸を織りゆく

愛媛 鈴木 和子
大分 羽田野とみ
鹿児島 大島 安徳

初雪の道につづける靴のあとわが摺り足のかたちのままに
道祖神すこしずらして若者は電気工事の梯子をかける
額縁の枠に途切れる細き道あの先は何があるのだろうか

秋田 大友 孝子
栃木 茂呂田 誠
埼玉 河原 敏子

炭焼きに通いし道は崩れしも猪や鹿らのバイパスとなり
弁まえて王道行くも難しい手練手管の囲碁の戦い
わが影の長し日暮の道の上延びて折れたりブロック塀に

東京 田倉 栄
神奈川 宮井 國雄
山梨 雨宮 清子

いくつものことは呑み込み会の果てあみだくじのごとく道帰る
犬山の光葉重なる初夏の道笑いが先に丘駆け上がる

岐阜 川出香世子
滋賀 田中 新一

題詠「道」

★佳作

獣めき競いて溯りくる鮭のけ散らすしぶき秋陽を砕く

青森 中里茉莉子

「では またね」米寿の姉の手紙にはリボンで結ぶことき未文

岩手 長野 倫子

花柄の日傘くるくる廻しつつ小春日あつめては返す人行く

宮城 小野寺敦子

逆光に影絵となりしをのこらの飛ばすゆばりは銀色の虹

栃木 高村 光夫

真白なマスクの下は笑みだらうナース目尻に皺を寄せたり

埼玉 鈴木 興山

ロボットはチェコ語で奴隷のことなれどほどなく人は従者にならむ

埼玉 中門 和子

無意識に手が蛇口までのびているもう七日目の断水暮らし

千葉 斉藤 久子

国後島を追はれし人の呼ぶ声か知床岬流水が泣く

東京 勇川 誓一

白杖の少年が吹くオカリナの「ふるさと」冬の雲に乗りゆく

東京 久保 親二

玄海の風さむうして弔辞なかば嗚咽止まざりアフガン大使は

東京 吉田 能明

念入りに洗ひてぬぐふ父の義歯マグに沈めば笑ふがごとし

東京 吉田 能明

一点をじつと見据えて振り下ろす杭打つ人の軸は揺るがず

東京 栗田よしを

不器用と言いつつ綿入れ縫い上げし亡母の針箱「きよ」と名のあり

神奈川 内藤 洋子

山の田の脱穀終わり山下るお疲れさまの案山子も担ぎ

長野 市川 光男

空へ向け星吹き上げる男らの手筒火花は燃えつきて闇

愛知 鈴木 保江

満月を蹴上ぐる金のシャチホコを想像するさへたのしき秋夜

愛知 藤掛 宏子

運動会借り物競技出場す他人の妻と走り一等

三重 奥山 功

腹割かれ縛られ梁に吊されし塩引鮭や千尾圧巻

兵庫 佐保田全弘

手になじむ鍬を杖とし畦に佇ち久にして聞く入相の鐘

和歌山 奥田 房子

胸内を知ること笑みます御仏に小さく小さくなりてわれ坐す

山口 吉村 京子

火色なき電磁調理器の一人鍋湯気のむこうにだあれもない

愛媛 高橋 征子

二百グラムの胎児の火葬に見る心縫い針ほどの骨がいくつか

熊本 益田 節子

柄杓とり手を清めぬる御手洗に箭山の紅葉が底ひにうごく

大分 南 静子

二度三度くるま椅子の輪を前後させ児は石塊をのりこえにけり

大分 山崎美智子

少年と少女の顔して金婚を誇るでもなく祝はれてをり

大分 三浦 初音

題詠「道」

雪国の冬の出稼ぎはるかなり「とき」の轟音・関越の道

茨城 大和千鶴子

昼こめて風鈴の鳴りこの夏も地図には載らぬ風の道あり

埼玉 村上 文江

ノーサイド攻めた堪えたワンチーム皆で謳うビクトリーロード

埼玉 木下 南洋

道ばたの名もなき草に成りすます青きかまきり子を宿すらし

千葉 渡良瀬愛子

家ぬちに踏み固めたる道がある厨に至る吾の動線

千葉 平本 葉子

駅までのいつもの道がキャンパスに今日の紅葉は今日だけの色

東京 徳田 知也

買物ゆ戻れば三寸のびてゐるひとりとぼつちの蝸牛の道

富山 山中美智子

少年が一本の道より歩き出しあちこち探検する絵本 (Michi)

長野 井澤 幸子

プラタナスの落葉色したフィレンツェの石畳行く市民ランナー

長野 手塚 一子

天動説信じたきかなのつしのつしと朝陽が山を乗り越えて来る

愛知 三好 ゆふ

夕闇につつまきれない北海道真白きそばの花盛りなり

愛知 笠井 忠政

道標を斜めに越えて黒揚羽青筋一本羽根にかざりて

大阪 山本 達

岩盤に轍の深し港へと葡萄酒樽の運ばれし道

兵庫 齋藤恵美子

満天に北星到る道標柄杓の先へひーふの五倍

愛媛 藤堂 三郎

中学生歌を唄って帰り道こえ裏返って青空に飛ぶ

福岡 小谷 清子

月岡 道晴 選

★特選

いとしきはわが育児日記母も子もうれしく楽しく紙上で跳ねる

東京都 半田 たつ子

自らの記した育児日記を時経てから読み直しての感懐。日記に書かれた古い文字の中にはまだ子が小さく、うれしく楽しく跳ね回って共に過ごした日々が保存されていた。その日々ごとく愛おしむ日記。

念入りに洗ひてぬぐふ父の義歯マダに沈めば笑ふがごとし

東京都 吉田 能明

父の義歯を子が念入りに洗って拭うのはどんな機会だろうか。もう父自身では洗わなくなった、いや洗えなくなった義歯を最後に入念に洗って仕舞うのだろう。父の代わりに子に微笑みかける義歯。

題詠「道」

板扉に白杖当てつつ道なりに駄まで兎は歩みゆくべし

大分県 山崎 美智子

「べし」のはたらきを生かした詠。子規の句「鶏頭の十四五本もありぬべし」を想起したい。病臥の子規が庭の花を想像するしかなかったように、目の見えぬ子の道のりを祈るように想像する親の姿。

★秀作

里芋の葉に溜りたる白露を覗にそそぎ月の歌書く

宮城 高橋 健壽

裏口を出でゆく柀目で追ひて普段どほりの施設の食堂

群馬 横山 房子

真白なマスクの下は笑みだろウナース目尻に皺を寄せたり

埼玉 鈴木 興山

母からの仕送りの中に入ってたハローキティの傷絆創膏

千葉 ミラサカシラ

六人の姉妹平均八十八歳かけくる電話の声は突風

東京 高島みい子

一点をじつと見据ゑて振り下ろす杭打つ人の軸は揺るがず

東京 栗田よしを

百超ゆる灌溉用水の栓締めて今年最後の仕事終へたり

長野 中野 寛人

悲しみを握つてはならべていたんだね母を亡くした児の砂あそび

愛知 藤掛 宏子

吉報の受話器おろして眼鏡拭く息吹きかけていねいに拭く

愛知 笠井 忠政

茜さす朝の光に照らされて亡き母のごとく若水を汲む

愛知 近藤輝久江

新薬の中にすっぽり身を沈め本を読みたる納屋なつかしき

愛媛 井上由美子

まだ温き父に履かせる旅立ちの足袋の白さよ暁の星

福岡 山脇香代子

題詠「道」

ふわふわの畑の蒸気につつまれる春の富良野の起伏ある道

北海道 伊藤 哲

半島を巡るあなたに道問えば「今まさかりの刃を走る」

青森 佐々木絵理子

二五三人相寄り紙に向ふ書道練成会海のごとしも

宮城 大和 昭彦

ペダル踏みリンでかたらふ思ひでのけやき並木の木洩れ日の道

宮城 遠山 勝雄

道祖神すこしずらして若者は電気工事の梯子をかける

栃木 茂呂田 誠

食細き妻の食道に閑所あり伊勢うどんのみ通行御免

三重 内田 雄亮

胸底に廃油の溜まりくるようなる…見舞いを終えて坂道下る

大阪 佐久間雄二郎

家ぬちに踏み固めたる道がある厨に至る吾の動線

千葉 平本 葉子

★佳作

ちやんちゃんこ着て黄の帽子被りたる米寿の夫のひまわりの笑み	北海道	秋本	洋子
スカートの裾をパンツにキュと挟み逆上がりしたたんぽぽ公園	北海道	後藤	明美
「では またね」米寿の姉の手紙にはリボンで結ぶことき未文	岩手	長野	倫子
山菜と野草ならべてしたたかに春を呑み込む天麩羅の会	宮城	角田	正雄
押し入れの隅に隠れし幼子のいまだ鬼まつごとき老いの日	茨城	岡部	千草
屋号もて呼び合う古き町並のわが家は種子屋隣は下駄屋	栃木	箕輪	イセ
はつ恋の君がジイジと呼ばれおり駆けつこの速い少年だった	栃木	福田樹生里	
お試しのデイサービスに夫送り空気の抜けた風船となる	群馬	田村	敏枝
刑務所の矯正展で先輩に再会したりまた刑務所で	群馬	小森	真一
ブラウスの釦を舐めている母の掌にのせる赤いドロップ	群馬	山下美津子	
ロボットはチェコ語で奴隷のことなれどほどなく人は従者にならむ	埼玉	中門	和子
秋真昼蕎麦打つ友の手際よさ笹に盛らるる光をすする	埼玉	仲野	重子
グググッと地を押し上げる霜ばしら北総台地の沃野の力	千葉	高仲	一郎
七十路は開き直りて生きむとぞ夜明けのコーヒー一氣に飲み干す	東京	西川	芳子
退職の花束かかえ昼下がりに帰宅せる夫しばらく黙す <small>もた</small>	神奈川	大石	知子
十歳の孫の目の行く本棚にエリ・ヴィーゼルの『夜』を並べぬ	神奈川	桐生	春江
空へ向け星吹き上げる男らの手筒火花は燃えつきて闇	愛知	鈴木	保江
生年の元号として「明治」とう選択がまだ残るこの紙	愛知	高橋	みどり
脳腫瘍の手術を受けし少年が駅のピアノで「未来」を弾けり	京都	長尾	律子
病室にあまい香りがほんのりと印度りんこの肩のうすべに	大阪	佐久間雄二郎	

題詠「道」

この湯気に助けられたりまずお鍋平らげてから泣くことにする	和歌山	中尾	加代
一本の紐をリボンに変えるごと小暗き里に沙羅の咲きたり	鳥根	田中	勝美
ぼこぼこまるい茶色の集まりがぱつと飛び散りすずめとなりぬ	広島	田中伯見子	
三分ほど経ちて診察室を出る患者はウルトラマンの一族	長崎	田中	光子
二度三度くるま椅子の輪を前後させ児は石塊をのりこえにけり	大分	山崎美智子	
通院の帰りに寄りたる道の 駅牡蠣ふくふくとスパゲッティ食ふ	秋田	箕浦	宮子
二輪草群れ咲く実家への近道は沢水を飲む熊の来る道	群馬	細川のぶ子	
この道は子らと来た道散歩みち春を待ちつつデイケアへ行く	千葉	後藤	親子
寄り添って歩くことなどなく老いて妻の手を引く通院の道	千葉	春原	由治
進学の高級生が自転車をつらねて通る道をさけたり	千葉	山岸	美江
炎暑のなか舗装道路をひた走る逃げ水にのり溶けてゆくわれ	東京	高橋	澄夫
小春日に肩すりあえる遊歩道あくびする人のあくびをもらう	山梨	望月	八隅
カーナビに新しき町はまだなくて海ばかりなりその道を行く	山口	石井久美子	
沿道のいちにんなりき平成はつかのま通り過ぎた駅伝	香川	氏家	長子
ユキヤナギひと枝すずんと揺れにけり天道虫の重さを受けて	愛媛	宇和上	正
この緑この風が好き故郷の青田の道に深呼吸する	愛媛	井上由美子	
これからの道悠悠と歩きゆかん孫のお下がりのスニーカーよし	高知	山中	直美
旅行はもう無理だらうと言はれた日道路地図買ふ日本全土の	福岡	融	子
日が暮れて祖母に連れられ裏道を穀物借りに分限者の蔵	宮崎	大賀	泰山

時田 則雄 選

★特選

泣く
 国後島を追はれし人の呼ぶ声か知床岬流水が

東京都 勇川 誓 一

国後島は北方領土の一つ。元島民の高齢化が進んでいるが、領土問題は一向に進展しない。流水の泣き声は元島民の悲痛の声。「叫ぶ声」は「島をはやく返還してくれ」という声なのだ。

介護してくれる夫居て暖かき冬の窓辺に二人
 茶を飲む

福岡県 三好 礼子

作者は体調を崩され、御主人の手を借りながら日々を過ごされておられるのだ。二人で窓辺の日溜まりのなかに座り、世間話をしながら茶を飲む姿が浮かんでくる。ほのぼのとした夫婦愛。

題詠「道」

枝打ちに下草刈りにと半世紀林業の道父は貫く

栃木県 関本 ナヲ

伐採をした跡にはまた苗を植え、下草刈り、枝打ち、除間伐をする。つまり林業というのは何代にもわたって営まれるものなのだ。作者はきつと父が育てた木々の管理を引き継いでゆくことだろう。

★秀作

潮騒ぎ波の花咲くオホーツク渚に立ちて故郷を吸う

寒空に重機のアームゆつくりと橋の架け替へ工事は進む

柚子の実が籠一杯にあふれば人みな和み饒舌になる

もうすでに問う人あらずこの夕べ墓誌の余白のつくつくぼうし

炭焼きの自慢話で飲む人も居なくなつたな令和の酒場

カワセミは昼の光に羽広げ蓮田の水面に姿を映す

百超ゆる灌溉用水の栓締めて今年最後の仕事終へたり

家苞いんづとにもとめて帰る松川の桃香り立つ猛暑まひるま

マシユマロに触れてるような小さな手人差し指をゆつくり握る

池の面の布袋葵が咲いている一人の友を送つた夜に

病室にあまい香りがほんのりと印度りんごの肩のうすべに

新薬の中にすっぽり身を沈め本を読みたる納屋なつかしき

題詠「道」

五千歩の歩みをその日の日課とし足どり軽く野の道を行く

道ばたの名もなき草に成りすます青きかまきり子を宿すらし

下肥を担ぎのぼりし故里の畑への道はいまけものみち

ひたすらに大工の道を歩み来て八十路ひとり足場組み終ふ

秋うらら横断歩道ベーカー双子の手足風が撫でゆく

ボクサーのごと構へ立つ蟬螂を除けながらゆく秋冷ゆる道

父母眠る墓地へと続く道筋に標の如く彼岸花咲く

道祖神すこしずらして若者は電気工事の梯子をかける

北海道 廣瀬 猛士

青森 赤沼 淑子

茨城 豊田 雅子

埼玉 小高 佳子

東京 田倉 栄

神奈川 西田 陽子

長野 中野 寛人

岐阜 古井富貴子

三重 小林 寛久

大阪 佐久間雄二郎

大阪 佐久間雄二郎

愛媛 井上由美子

埼玉 武井 猛

千葉 渡良瀬愛子

千葉 岩崎 勝

福井 児玉 普定

愛知 加納 金子

大阪 船越 一英

大分 田中由岐子

栃木 茂呂田 誠

★佳作

山深き僻地五級に腰をすえこつこつためて父に送りぬ
 バスを待つ防災頭巾の園児らに防空頭巾のわれが重なる
 木犀の香りて思う植えしより三十年の過ぎ来し日々を
 睦まじく秋刀魚三びき六人で分け合い食みし戦後のわが家
 新緑の世界真下に見渡してロープウエーは山頂目指す
 音だけの火花が届くベランダに夏は終わりと風が告げ来る
 大掃除はたきかければ障子戸に姉さんかぶりの母の面影
 無意識に手が蛇口までのびているもう七日目の断水暮らし
 遠浅の海まで駆けた浜は無くテトラポッドに波打ち寄せる
 ガラス戸の向かうに小さきかまきりが動かさずじつと吾を見てをり
 白木蓮咲きて明るき特養ホーム入りくる日差しに夫は居眠る
 三枚ののし餅届く大晦日「長生きしてね」甥の一筆
 菖蒲田の花咲くあわいの水の面に黒き揚羽は影映しゆく
 不器用と言いつつ縮入れ縫い上げし亡母の針箱「きよ」と名のあり
 嫁ぐ日の孫の姿に涙せり共に過ごしし日々を思いて
 冬山に童ら集ひて遊ぶ如たわわに実る柿のくれなゐ
 最終のケールカーに振り向けば駅員の背に満天の星
 秋空がきれいに映る水たまり台風一過の安堵も映す
 刈り取りを終えし山田に立つ案山子破れ帽子をななめにかぶる
 「野菊の墓」の映画に泣きし亡き夫よ野菊があまた今年も咲けり

北海道 齋藤 よつ
 秋田 大友 孝子
 福島 小林 綾子
 福島 津田 智
 茨城 茂呂 典正
 栃木 染宮 千美
 群馬 高橋 増江
 千葉 斉藤 久子
 千葉 川口由美子
 東京 久恒 恭子
 東京 関根ミサ子
 東京 渡辺 桂子
 神奈川 渡辺 勲
 神奈川 内藤 洋子
 神奈川 大塚八重子
 福井 永田きみ子
 愛知 清水 良郎
 愛知 野崎 祐子
 愛知 山本 恵子
 京都 日沼 澄江

題詠「道」

故郷よりあまたの野菜とどきたり家族の絆ますます深し
 入口のドアに鍵かけ一人居のひと日楽しむ今日日曜日
 食卓の林檎の香りの温かさ丸ごとかじり心を充たす
 お揃いのカップで飲みおり午後三時われはコーヒー妻は紅茶を
 コスモスのやうなる母の優しさがふと甦る高原の秋

いびつなる野菜抱えて農の道を選びし姪の顔がかがやく
 春の日に揃いの白きヘルメット光りて道路工事は進む
 すこやかに孫よ育てと亡き義母は道辺の地蔵に赤き腹掛け
 台風のせまり来る朝ひた走る東北道に虹のかかりぬ
 登校の雪深き道長靴の口しぼりくれしおじさん偲ぶ
 夕映えの大利根のぼる漁師舟水脈を一本海より曳きて
 身も軽く電柱登る作業員七つ道具を腰にぶらさげ
 スコップ手に地道に井戸を掘る人ら中村医師と沃地を夢み
 引きこもる生徒に会はず月光に背を押されて夜道を帰り来
 はらはらと萩散る道もなつかしや峠の茶屋の婆は百歳
 道くさの大好きだった我が娘今は教育ママとなりたり
 雨の日は道の轍に浮かびたる並木の影が淋しく揺れる
 ふるさとの坂道登り見る庭に母の育てし水仙咲けり
 この吾を学問の道へ押しくれし読み書きおぼろな漁師の父は

兵庫 竹内 安子
 岡山 大森志津江
 広島 安藤 民代
 福岡 新倉 正成
 大分 菊地 孝也
 宮城 小野寺敦子
 茨城 田中 久子
 栃木 阿久津典子
 埼玉 安達由利男
 千葉 今野 淑子
 千葉 斉藤 肅江
 山梨 渡辺さちえ
 長野 近藤 浩子
 愛知 嶋田 稔
 兵庫 藤井美佐枝
 兵庫 木村 仁美
 香川 森本 義臣
 熊本 新田 幸子
 鹿児島 大島 安徳

西勝 洋一 選

★特選

火色なき電磁調理器の一人鍋湯気のみこうに
だあれもない

愛媛県 高橋 征子

安全な電磁調理器で鍋料理をして食事を取っているが、気持は何となく満たされない。炎の色も見えず、食事を共にする相手もない。下の句で、その寂寥感を端的に表現して印象深い一首になった。

十歳の孫の目の行く本棚にエリ・ヴィーゼルの『夜』を並べぬ

神奈川県 桐生 春江

十五歳でアウシュヴィッツを経験したエリ・ヴィーゼルの自伝的小説『夜』を十歳になった孫にもいつか読んでほしいと願って目につく所にさりげなく置いた。抑制の効いた内容と文体が光る一首。

題詠「道」

道の辺の刈田の匂ひに立ち尽くす郷愁ひたと
降つて湧く秋

和歌山県 木村 いく子

通りがかつた道辺の刈田の匂ひにつつまれながら、さまざまな思いが去来する。農業に携わっていたのか、そのような環境に育ったのか。下の句の巧みな表現で、季節の情景と思いが膨らみつつ伝わる。

★秀作

アップルパイ買ひ来て食ぶる独り家に遠き津軽の父母を恋しむ
「だいじょうぶ」友の言葉は小春日のシヨールのように私を包む
裏口を出でゆく柩目で追ひて普段どほりの施設の食堂
一列目に並べなくても二列目で自分の道を生きるのもよいか

栃木 中山 多佳
栃木 中村 葉子
群馬 横山 房子
埼玉 森 久子
埼玉 安東 彰義

『初恋』を買ひ求めたり中一の春赤き表紙がまぶしく映えて
映ゆる赤老いの二人の残る日々自立をくれるラスト・マイカー
優先の席に駆け込みさりげなく帽子を取りて光頭を見す
母からの仕送りの中に入つてたハローキティの傷絆創膏

千葉 野原 浩子
千葉 石澤 廣太
千葉 ミラサカシラ

七十路は開き直りて生きむとぞ夜明けのコーヒー一氣に飲み干す
トンツとモールス符号打てる兄十九歳を征きて還らず
百超ゆる灌溉用水の栓締めて今年最後の仕事終へたり
近づきしオリンピックの騒めきに辺野古の海はかすみて見えず

東京 西川 芳子
富山 古澤 澄子
長野 中野 寛人
鳥根 小村ミチ子

題詠「道」

根釧の真つすぐに伸びし道帰る亡き義父の牛呼ぶ声のする
どんぐりを袋の穴から一つずつ落とすとしていくよな古稀の坂道
枝垂れ咲く藤の連れくる遠き恋この道ゆきて君は還らず
人生の道連れとして吾を選び先に逝つた妻よお疲れ
もう少しだけと背中を押しくれる亡母のコートをはおりし時に
沿道のいちにんなりき平成はつかのま通り過ぎた駅伝

北海道 菅野 礼子
茨城 岡部 千草
栃木 中山 多佳
埼玉 村田 利雄
石川 棚野 智栄
香川 氏家 長子
長崎 長谷智香江
鹿児島 大島 安徳

★佳作

山深き僻地五級に腰をすえこつこつためて父に送りぬ
 雪溶かすまでの力はあらねども猫を眠りに誘う冬の陽
 潮騒ぎ波の花咲くオホーツク渚に立ちて故郷を吸う
 痛いほど強く握れる吾の手を支えとなして母歩みつぐ
 獣めき競いて溯りくる鮭のけ散らすしづき秋陽を砕く
 古里の訛きくべく菓子を売る軀を再び物産展に尋ぬ
 ひさかたの青雲の坂を駆け抜けし鶴巻早稲田馬場下恋し
 働く時はシルバー人材と呼ばれても事故を起こせば高齢者となる
 新年の欠礼葉書すりながら消されゆくらむ夫の名おもふ
 電動の自転車に軽く坂越えて老人我は少年になる
 今日始まる百年先の未来持つ三千グラムを慈しみ抱く
 目に染みる鮮やかな夕焼けだなあ離れた土地で父の死を聞く
 赤子背負い野花つみつつ児のわれは畑より帰る母待ち侘びき
 虫干しの赤いマントを眺めれば記憶の淵よりアリアが聞える
 憧れとためらいのあるグレーヘア決断できぬ吾に苛立つ
 四ヶ月売れ残つてゐる犬だつたエルが財布の奥に見つめる
 亡き母のテレフォンカード一枚が癌のページに眠りてをりぬ
 事あらば「冥土のみやげにする」と言う百二歳の母の荷は増しゆかん
 「仕事終へ夜は学舎のわが青春「石の上にも三年」と父が背中押す
 言いたらぬ想いのたけをスタンブに込めて送りぬ星のキラキラ

北海道 齋藤 よつ
 北海道 伊藤 哲
 北海道 廣瀬 猛士
 北海道 吉田この実
 青森 中里茉莉子
 宮城 鹿野 道子
 秋田 下村 清
 福島 松浦 恭子
 群馬 松下 昭代
 埼玉 鈴木 興山
 埼玉 石田 恵子
 東京 丹羽 敏彦
 東京 町田 サチ
 東京 細越 幸子
 神奈川 木村あつ子
 神奈川 西崎 恭司
 長野 新村 亮三
 愛知 中村佐世子
 岡山 安井 孝誌
 愛媛 梅原 秀敏

わが願い託す思いで見送りし遍路はゆつくり橋の向こうへ
 石投げて韓国人をからかった戦中日本の子どもわれら
 身の丈が百八十五の長男の小さくなりし遺骨を抱く
 電子辞書に廃炉を引けば福島の事故知らざりて記載無かりき
 キャッシュレス世は決めたれど自販機は秋風に吹かれふんばり居たり
 題詠「道」
 いびつなる野菜抱えて農の道を選びし姪の顔がかがやく
 寄り添いて歩くことなどなく老いて妻の手を引く通院の道
 愛犬の思い出尽きぬ散歩道ほはばも時間も変るさびしさ
 菩提寺へ続く砂利道夕陽射し枯れ葉の匂い頭上より降る
 たおれいる仔猫に添うは親なるかおごそかな気の充つるこの道
 若き日に胸病むときを重ねつつはるけく歩み来りて九〇年
 頑張りと独善の差を自覚せず走り続けた青春の道
 股関節手術受けたる足を上げ踏みしめ歩く紅葉の道
 天職とひたすら歩むこの道を継ぐと言う子と仰ぐ虹空
 ふるさとへの道を断たれて幾星霜 隔離の島に友は老いたり
 花束を抱いて夜道を夫帰る師走の雨やむ任ほどけし日
 手術待つ窓より見下ろす道沿いに家族で集いし焼肉屋あり
 明けやらぬ山道くだるトラックは俯く廃牛一頭乗せて
 先人の苦勞の末に敷設せる鉄道路線消える寂しさ
 わが進む道はこれしかないと行く身障の身に選びし仕事

愛媛 宇和上 正
 高知 佐野 暎子
 熊本 岩城恵美子
 大分 佐藤 政俊
 宮崎 熱田 民恵
 宮城 小野寺敦子
 千葉 春原 由治
 千葉 石原 一久
 東京 久保 親二
 東京 高橋 登喜
 東京 半田たつ子
 愛知 清水 将一
 大阪 岡 高代
 兵庫 大井 順子
 鳥取 荒井 玲子
 岡山 藤井 繁子
 広島 上田千津子
 長崎 長谷智香江
 大分 菊地 孝也
 鹿児島 萬福 平次

入選

北海道

アフガンの星になりたり中村哲氏赤き光に続きゆく人々

安高 浩子

いま少し生きてみようか生垣しょうだんつじの満天星とうだんせいの燃ゆる紅くれなゐ

足立 幸恵

赤紙に取られて逝きし父の戦後生きて令和の空を見上げる

大野 明子

砂時計は人生に似たり静かに呼吸いきを積み重ねやがて絶ゆるなり

今 ゆきの

ひととせを納戸で眠る大鍋にあふるるほどの旨煮つくらむ

斉藤 純子

泥流を沃野に変へし石狩の大地遙けしキラリ雪積む

佐藤てん子

飛石を踏みて訪ふ日暮亭「季葉点心」は瓢の器

佐藤 道子

多用と言う言葉に我を安堵させ今年も確かな証つかめず

杉本雅勢子

亡きベツカムの綱見失ふ二年目のオリオンは低くあらはれてゐる

高橋 克枝

澄む空で十勝の牛乳みるく飲み干して小田かんけい観いも齋き藤ちく茂くみ吉すずの蹠を捜す

高本 智宏

吟じるし声は展びゆき雲と和す一年ぶりの海に顕つ亡夫

手塚 春世

一発の銃声も聞かなく一発の弾も撃つなく古稀を越えきし

那須 洋治

逝く時は何も持たないのだからか石でも棒でも握っていたい

樋口 幸子

レコードに針を落とせば君の声ノイズに混じる秋の夕暮れ

三浦公佐子

小雪降る朝もリングとヒマワリの種の飼台へシメとヒヨドリ

宗片勢津子

.....題詠.....

残り葉の散る音を背にせかされて並木の道の夕暮れ急ぐ

大野 明子

しみついた藁の匂ひは母の背に負はれて向かふ田んぼへの道

木戸 善輝

道なかばと言はるるままに逝きたしと振り返り見る雪の足あと

斉藤 純子

六十の赤子へかえる半ばゆえ三十路のおれは三十路の見ため

斉藤 康

眼球はばつと印せる臓器提供 黄泉路に逢ひたきいちにんのあり

斎藤 陽子

第七師団の軍都と誇りし旭川「師団通り」を訪ひ憧れぬ

佐藤てん子

漁追ひし四十五年の道のりを船員手帳ひらきておもふ

四家不二夫

一本の夜道を照らす月光に似ている君の深いまなざし

住吉和歌子

今もなほ輝きあらむ亡夫の立つ雲石峠の芒のなだり

手塚 春世

杖友と言はれたるかな雪道に庇ひ合ひたる姿見られて

長谷川君代

帰り道はゆるい上り坂この坂にかかる心と心が整ってゆく

樋口 幸子

雪の庭猫の足跡点と小さき花の小道のように

宗片勢津子

走行の宗谷丘陵樹樹傾びくき矮ひくき笹原縫ふ道つづく

山本美智栄

青森県

昼過ぎて予報通りに降る雪は万年青の紅き実を隠しゆく

大野あつ子

掘り出せばたちまち野菜の貌となるほたりと土を落として葱は

小山田信子

誰も居ぬ生家は朽ちる狭庭には明るきコスモス秋陽にやさし

櫻庭喜久枝

人生はうまくいかぬと震災で一人となりし老婆つぶやく

種市 要司

.....題詠.....

カーナビに逆らい走る帰り道目を閉じハミング助手席のひと

澤 久枝

岩手県

初雪の朝は一面白一色やり残したまま場面が変わる

菊池 陽

最終戦跳び上がりざま一本を決めて男の子の薙刀終わる

南館 増子

窓開けて半月ですよという妻の伸びた背筋の愛しさ見つむ

休石庄太郎

.....題詠.....

声かけて足を励ます月見坂かの日義経が駆け抜けし道

貝沼 正子

マスコミのカメラはいつも路傍より報道はする香港のデモ

菊池 陽

山積みの稲わら揺らしトラックは一直線の農道過ぎる

長野 倫子

宮城県

嵐やみ雲の乱るる夜の空に十日の月の見えかくれして
むべなるかなあの立ち姿医者のお問ふ「本人ですか」卒寿の叔父に
青空とつばさこすれる音のして夕ぐれ帰る海鳥親子
幸せよ吾れに達者な妻がいる伴侶亡くしし友見て思う

……………題詠……………

「道」という名前を付けて良かったと思う娘の背中を見ては
月のぼり牛車にゆられて帰る道束稲の中にとうとうとと眠る
蒲公英の花を追ひかけ鶯の声に押されて登る柚道

秋田県

日なたより根雪を除けて一斉に山毛櫛立ち上がる春の来にけり

……………題詠……………

凍てしるき道ゆく夫のウォーキング薄水を履む思いして待つ
托卵の季来たるらし山道を独りし行けば郭公のこゑ

山形県

上昇する機窓より見る最上川長蛇の如くうねりて流る
帽子の後ろにポニーテールを出す乙女害鳥駆除に銃構へをり
青白き顔で見送る病む夫に笑みを残して夜行のバスに
庭に立つ大銀杏の葉散りつくし時を遠へず雪は降りくる

……………題詠……………

稲の穂の垂るる畦道散歩路夕べのひかりわが身を包む
一冊の歌集を抱えて帰る道ふり向けば雨に光る図書館

福島県

雲海と燧ヶ岳を望みつつ蕎麦の花咲く高原歩む

齋藤美和子

千葉 光三

遠山 勝雄

沼倉 匡志

河野 大地

齋藤美和子

角田 正雄

下村 清

大友 孝子

下村 清

名和 利子

蜂谷 弘

松田たつ子

水澤タカ子

飯田 節子

村上 秀夫

橋本 愛子

銀嶺のつらなる空はみづあさぎ五月の信濃父が野に立つ

ごくごくジュース飲む児らの喉と缶おもむろにして空に向きゆく

傷む本の点訳者名は父の名となぞりて友は修復をする

目を開けてうなずき母はまた眠る最後となりし「明日も来るよ」

卓上の白桃ひとつ手にとれば赤子のお尻のごとき感触

屁理屈を言う孫たちに屁理屈で返したくなり、三つ数える

突風に立ち竦みしをガラス戸に映して髪の乱れ手に梳く

津波にて防風林の消え去れど今もありありと松葉がしげる

……………題詠……………

裏山の狐の通る細道にほつほつ咲きぬ節黒仙翁

「ちよっとこい、ちよっとこい」と鳴き交わし小綬鶏の列農道過ぎる

赤井嵐に吹かれゆく道娘が編みし毛糸のマフラーほのぼの温し

一〇三の母長らえて彼岸への道のり遠く施設に頼る

一つだけ妣に求めし道明寺雛さまよりも先に供える

授業中脇道に逸れ音楽を語る恩師の渾名忘れず

農道も舗装をされて過ぐるたび五軒の里が陽を浴びている

日本一長いトンネル抜け出れば山一面のぶどうの畑

見詰めればわれを蹴飛ばし駆け出さむ風貌したる道端の石

茨城県

常ならぬ渋滞続く氾濫の日よりここが迂回路となり

病院に友を見舞へば娘の街へ明日移るとふ娘に従ひて

鈍色の海原の果て十三湊 棧橋かざばな砂山の唄

生きるべき命なるよと点滴に注がれながらわが歳数ふ

八重藤の花を見せむと車椅子押し行く人も白き髪して

伊藤 雅水

鈴木 桂子

遠坂 洋子

遠坂 洋子

芳賀 ナツ

芳賀 ナツ

横山 秀子

渡邊 栄一

石井 弘子

小林 綾子

鈴木 桂子

鐵 マサ子

遠坂 洋子

新井田美佐子

芳賀 ナツ

水野 滋子

峯村琥珀山人

安蔵みつよ

安蔵みつよ

石塚 明夫

海老原輝男

加藤憲一郎

老木の柿の実あまた輝きて日に日に太り枝は垂れくる

垂乳根の母のつくりし瓢箪に傘寿祝いを書き吊しおく

美しく最期を飾れとささやきて落葉はころころ転がりゆけり

寒き夜の電気毛布を強にしてなお眠れずに寝返りをうつ

増税の前にと入りし喫茶店太きストローでタビオカする

戦中派 粗品につられ購入しごみ増やしつつ余生楽しむ

ノーベル賞の晩餐会の卓上に越後の匠のスプーンとフォーク

……………題詠……………

毎夕を幼の手を引き通ふ道共に唄ふは夕焼けこやけ

桜咲く「渡満道路」の長閑さよ繰り返すまい戦の世など

朝夕に一本道を通るなり雨戸は時に機嫌そこねて

見あげれば夏空蒼し筑波路の小沼の辺に赤い睡蓮

朝稽古の声がちまたを切り裂きて公孫樹散りつく坂の上から

走り抜く君と出会ひし海蒼き線量ポストの立てるハイウエー

栃木県

寄り道も旅の楽しみ道の駅B級グルメに家族が揃う

放射線治療のごとく月光は天窓より入る 右胸を射る

太陽を全員見ている向日葵の中によそ見の子ども向日葵

カレンダーに大きな丸をつけて待つ新年会に友と会える日

大空にあっけらかんと裂けにけり地に落ちてなお石榴の赤は

幹半分残る古木の梅の枝生さる力にこの身を託す

萩・桔梗・尾花・刈萱・女郎花・競い咲きける那須の山原

「ごめんさい」「いいよ」と言わせ儀式終ゆ 担任教師は苛めを識るや

乳首をしゃぶり初めて味を知り会話を覚えキスもする口

金澤萬里子

倉持 正紀

黒羽 千尋

小久保静子

田中 久子

山崎 和子

大和千鶴子

飯田 初江

黒澤 初江

小林 幸代

椎名 紀代

遠山 順子

森 純一

青木 一夫

小原 恵美

小杜 芳野

関本 ナヲ

瀧田 聖子

土澤 タイ

増淵 等

松山 宏意

松山 宏意

松山 宏意

みそつばが習いはじめた「あいうえお」サ行の音のあやしくなりぬ

男体山か横から見れば那須岳か名峰創る靄殻の山

言葉絶え夜の静寂の敷石に去り行く愛の足音聴きぬ

……………題詠……………

祖先等は黒潮を越え列島へ丸木舟を漕ぐ海上の道

風の道あるやも知れぬと宮司指すそのみ早も紅葉色づく

うつすらと足跡のこる雪の道わずかに遅れ新聞届く

星空へつづく参道除夜詣たき火の輪へと我も加わる

流水を北海道で見られないそんな日が来る今世紀末

未枯るる峽の道辺を灯すがに烏瓜の実の赤く垂れおり

五十年逢わざりし友わが家への道すじ変わり迷い辿り来

群馬県

母さんの季節が来たねと夫の言う千六本の大根味噌汁

みどり児を抱く心地で添い寝する猫の温みに癒され眠る

台風の間晴れ泥濘る田にただ黙々とコンバインの音

この冬で一番寒い朝が来た 遠くなりにし開戦記念日

高台のフェンスにもたれ返り咲ききやうを照らふ柔き秋の陽

濁流の響き深夜に聞こえきて遠き記憶のよみがえりくる

いてふには夕陽が似合ふおもむろにひとひらふたひら舞へばなほさら

彼の時に言い得ぬままに別れたる彼の女如何に五十年経ち

大熊座頭上高くに輝けり師走の風の吹き渡る朝

……………題詠……………

木漏れ日を受けつつ君と歩く時ふと歩が緩む奥入瀬の道

南天の葉のゆれで知る風の道昨日は台風今日はそよ風

茂呂田 誠

和田 文男

渡邊 力榮

青木 一夫

五十部澄子

中村 葉子

七井トシ子

松山 宏意

松山 宏意

渡邊 典子

相田 梯子

朝岡 雪子

東 富子

天田 勝元

浦野美代子

小山 伸樹

松下 昭代

松村 蔚

矢嶋 とし

相田 梯子

東 富子

東 富子

東 富子

曳く主の名は知らず犬の名を呼びて挨拶交わす朝の散歩道

今朝も逢ふ自転車通学つうがくの高校生清か目線の会釈を残し

霊柩車の助手席にのり帰路につくいく百回とかよひし道を

退院の吾子と並びて帰る道な花ふわり風にゆれいる

国後へ未だ帰れぬ漁師らの悲願身に沁む道東の旅

やまびこに想ひ託しし遠き日が峠の道にいま返りくる

埼玉県

萌えいづる蔵を見つめ「十勝野の春はおそい」と妻は微笑む

ハクビシンより水害よりも鉢もて盗らるが悲しと農夫は言えり

ヒデちゃんは君の青春の中に居て助手席にいま我は居るなり

ひたすらに昭和・平成・令和へと歩みて知りし生きるよろこび

三年間勤めた町の古かつたベンチが白く新しくなる

天使との握手と思ひひい孫ににぎられし指じつと離さずにおり

キョウリユウが首振るように作業車はアームを自在に家とりこわす

ばあちゃんに曾孫できるとはむ声十年目にしてコウノトリ来る

秋晴れの庭に広げた小豆打つとび出す小豆に猫もとびはね

まわったよ地球がまわった紫陽花の花にやつと 今 陽のさしはじむ

ひまわりのもう咲き終えたか花首にとまる小雀 種つついてる

洗濯物干しつつ母を偲びおり 洗濯板と八人家族

腰掛しいざり車を漕ぎつつの大根を播く秋空の下

遺歌集を見ては涙すありありと文字は君の戦記伝える

夫より生命保険預かる夜脳裡に黄泉が過ぎり打ち消す

参拝のち境内を一巡り冷気をまとう紅葉燃え立つ

ひよどりが林に群れて囀れり 日記にしるす十二月八日

佐藤 洋子

野口 弘

松下 昭代

松村 公子

松村 蔚

眞庭 義夫

安達由利男

井波 昭子

岩本 実佳

内野 恒子

岡田 美幸

小川ノブ恵

笠原 吉江

金井 圓子

金井 圓子

河原 敏子

河原 敏子

河原 敏子

木下 南洋

戸田美乃里

戸田美乃里

戸田美乃里

眞田 好男

三十年を過みそとせごしし職場の同期会、名前もどらず握手を交はす

一本のしだれ桜咲く六義園三百余年の歴史を刻む

十六夜の月がゆつくり昇り来る辻の地蔵を白く照らしぬ

ああ寂しこも住む人無き家か泡立草が我が者顔で

日盛りの無人の家に蔓伸ばし荒れ地の瓜は白き花咲く

園児らの鼓笛隊くるいまそかりありをりはべりラ変のリズム

モナリザに触れて寄り添い写真とる陶板画への微笑かえし

津波から八年このかた泣けず過ぎ涙ぶくろも波のかなたか

妻の部屋開け閉たてすれば居間にない少し気取った香り漂う

四十年負うた事などなき妻の儂しさを知る小さき骨壺

手のひらに踊る葉のカラフルさ赤・青・白・黄葉害心配

来春くるはるによいこと一つ予約する待雪草の球根うえて

………題詠………

信号なき交叉点にて黄旗振り学童通す緊張の刻とき

緑陰に深呼吸して一歩ずつ踏みしめ歩むリハビリロード

かたくりの咲く里山を訪ねきてうまさそば出す店に寄り道

迷いつつ進路を決めた子の心抱き締めると靴を揃える

道しるべ残して逝った夫なり踏み締めながら露の世生きる

凧が山茶花ゆらし吹く道を何思いゆくやせし野良猫

その昔女人禁制の慈光寺坂 けもの道めく女道おんなみちのぼる

風に舞う落葉踏みしめ歩く道去りゆく秋に足どり重し

透明な水をバケツに満たせども書道の児等の墨に染まれり

小松菜に紛れて来たのか一匹の天道虫が厨に遊ぶ

車道行く軽ガモ一家のお引越しお巡りさんも目を細めたり

渋谷 昌子

清水 三男

武井 猛

武井 猛

武井 猛

築根喜美江

中緒知和子

平塚萬亀子

村田 利雄

森 健二

森 健二

山口 月子

内田富美子

内野 恒子

金井 圓子

河崎 和子

河崎 和子

倉橋 眞子

小池喜代子

斎藤久美子

渋谷 昌子

武井 猛

武井 猛

武井 猛

「運命の道幅いっぱい歩いたね」会えたら聴きたい三十歳の母

カーナビに載らぬ道路にカーナビは左に曲がれ右に曲がれと

常よりも遅く咲きたるコスモスの畦にゆれおり露をまといて

ハロウィーンの仮装人行く道玄坂ビルのあいだに三日月さやか

九十迄生きた証に髪セット去年もうつした店に行く道

芽の出でしじやがいも捨てるあなたとは行く道ちがう友だちなれど

千葉県

新しき手帳を買はむわが街の馴染の書店ふたつ閉ぢらる

台風に傷つき落ちしカリンの実頑固で優しき父逝く白寿

ラガーマン被災の悲劇思ひ遣りいのりの黙禱世界をめぐる

わが実家を買とりし人も亡くなりき廃墟のさまに目をそむけ過ぐ

冬の野に元始乙女はゆばりして春待つ花の種を温めり

地震により「船は壊れたが海は元氣」北の漁師の気概たふとし

夭折の彼女の墓碑を訪ねあて灯せし燈火すぐ風に消ゆ

人住まぬ荒れし庭にも季節くれば彼岸花の群れ赤々と燃ゆ

孫のつけた卓上の傷に季節ごとクロスを替えて華やぐ晩年

冠水の土手にはりつく赤まんま計報二つの神無月往く

八十五歳四人揃ひて語るほどにやうやく趣味の披露のはじまる

二十年暮らしし町に降りたちて秋の江戸川しんみり歩く

おほきなる三里塚の春をつきやぶり桜を散らす飛行機の飛ぶ

ポケットの小さき解れに指入れてうじうじ行けば春にとどくや

雨もやう雲の蓋するうぶすなは離陸機の音こもる日常

車椅子の父に抱かれて少年は公園をぬけ未来を駆ける

眼圧というものがさらに増え測定数値が成績となる

中門 和子

築根喜美江

森 健二

森 健二

森田 良江

山口 月子

岩崎 勝

上田 康彦

浮田 治

大槻 裕子

沖田 妙子

窪田 文雄

熊谷 貢

小林 直江

小守谷うた子

斉藤 肅江

篠崎 伸子

菅井 昌子

高伸 一郎

高伸 一郎

高伸 一郎

塚越 房子

永野 晴菜

金婚式疾うに終えしに二人して夕餉囲むは無上の幸か

おなじ席まいにち座る人らゐる今日もゐるかとみる大相撲

小春日のベールをまとひ花匂ふ海辺の街のまどろみに佇つ

ソプラノのARIAは我に聞こえずも舞台と字幕見ゆる仕合わせ

枇杷山の大本根こそぎ倒れたり富浦の人ら復旧の日々

「青い山脈」歌う仲間のお互いの笑顔の皺に浮かぶ年輪

音重く九十九里浜打つ波の聞こえる朝台風近し

人の老い空き家となりし向ひ家に柿を啄むひよどり一羽

知る人がいるわけじゃない大祭で笑顔を拾ひ写真に撮つてる

黄道を追いかけし花壺に入りわたしとゴッホのひまわりとなる

霜をおく馬の睫毛はかなしけれ糧引く道の凍りしものを

山の辺に蒼生す地藏の座りおり道のけわしき教えておりぬ

ふる里の道の開発いま盛り山は傷つき天罰おそる

雨の日も徘徊する夫支えつつ歩みしこの道今淋しみて行く

台風に崩れしままの杉林歩めば枯葉冬の音立つ

帰り道上弦の月くつきりと遊びつかれたあの日と同じ

冬来れば越せるかしらと言ひし母老の道ふと思う寒の日

坂道の行く手遮る冠雪の富士凍て晴れに光りかがやく

じふたいの車列ひきつれトラクター代掻きの泥零しつづ行く

榎のごとく歩み来たりし七十路の織り目の不揃ひいとしかりけり

十五夜の月の明かりの散歩道独り舞台の女優めきたり

書の道で居場所ができて四十年子らと繋がり親と繋がる

浜辺 道夫

樋口かほる

平本 葉子

船津寿一郎

古山 春枝

溝田 節子

森田 満子

山岸 美江

山本 敏子

大槻 裕子

大槻 裕子

葛岡 昭男

窪田 文雄

小林 直江

斉藤 肅江

嶋田 博子

菅井 昌子

みそのゆい

高伸 一郎

高伸 一郎

堀川 紀子

山本 敏子

東京都

断捨離はごく一部なるに何となく全生涯を否定せし心地す

青木 久彌

捨てて悔ひ残して悔ひの断捨離を加速するべし病む身となりて

青木 孝子

閉店の文字が五感呼び起こすそば打つ音と出汁の香りと

阿部 尚美

足延ばし面影橋をめざしゆく桜紅葉の散り敷ける道

石崎 民子

紅葉まつり太鼓を叩く少女らの頬のしだいに紅に染む

石田 邦子

傘寿へと目前のわれみづからにリハビリ励めと命令くだす

石田 信枝

消え去りしホームレス歌人の歌哀しポイントセチアの赤が目沁む

稲葉 町子

交番のお巡りさんも夏服になりてさやかに事務とりをりぬ

内田 くら

日めくりを気まぐれカレンダーとせし孫に長く短く時流るらし

内山 郁子

「考える力をつけろ」「どうやって」教師答えず生徒動かず

遠藤 玲奈

ひさしぶりに裁縫すれば猫のいた日々を思わす西日の部屋は

岡本 和子

冬桜咲ける御苑に両神の千木もりりしく大嘗宮建つ

奈良佐保子

荷を背負うも古稀で漸く荷を下し来る年傘寿はこれからの道

岸浪 一正

山茶花のこぼるるままにしておかれ下校の児らの約束の声

北島 孝子

窓下に何時に咲きしか曼珠沙華写メールにして真つ赤を送る

木村 悦子

引き揚げの思い出ありし昭和なり平成令和平和を生きる

栗原 幸子

隠れん坊することだれか通りしか夕べの墓地に笹の葉揺るる

栗原 良子

ああ黒き蝶ゆるやかに通りゆく読経さなかの夫の墓前を

小泉 幸子

バスで会い少し語って友降りる降りしバス停がセンター前

近藤 精一

手水舎の冷たき水に愛らしく雀交互に水浴びてをり

櫻井 司

ペランダに置きたるままの羽衣草萌え出づ一の葉二の葉三の葉

澤田加津子

土砂降りの中をペダルで疾走す病院帰りの十五分間
亡き吾子の墓参りのたび川覗くあの子の愛したカワセミゐるや

志田 彰子
柴田 慶子

洗面台に首さし出して洗われる打ち首想い南無阿弥陀仏

高橋 澄夫

球児たち死闘をつくし涙する再び踏むぞかき寄せる土

瀧澤 春子

鳴く為に生きていたのだ晴れやかにピンピンコロリ蟬のこえ止む

新美喜代男

流れゆく雲はふたすじ夕暮の水面に映し今日は終りぬ

野田 保

初場所の鼻肩の四股名が出てこない呼び出しまでに思い出したし

蜂谷かほる

終活で見つけし古き住所録連絡途絶えし友多くいて

早川 笙子

赤い眼の恐竜模型が首と尾を振ってクウォォーと令和を睨む

林 璋

三の西シヤシヤンシヤンの手締めして今年もあつという間でしたね

林 博史

帳開き陛下立ちませる高御座今し吹きくる令和の風は

平野 町子

にこやかに話かけこし人なりき医院の椅子に並び座しあて

廣部 周子

尾瀬沼の青き水面に白き雲二人の「内緒」乗せて流るる

古川 芳宏

ブルマーでテニスをしている女生徒の写真を妻は「私よ」と指す

松平 信久

なる様にしかならないと言いながら寡男がひとり焦れております

本橋 正明

病室の夫と別れて夕間暮れ綾瀬川の面秋風の立つ

山崎 貞子

ただひとり勇み心をしずめむか落葉の声を黙して聞けり

横尾美知子

上蔭のとき迎へしやアフガンの医師はちひさく棺に眠れり

吉田 能明

病院の待合室にてほんやりと外は青空 観覧車回る

吉野 葉子

消さないで退院したら見るからと妻に言われしビデオ消去す

渡辺 進

..... 題詠

いくたびの好連続きし我が人生妻もちきたりしと漸く気付けり

青木 久彌

あらたまの春へと道をひらきゆく除排雪車列の音轟轟と

石崎 民子

坂道の向こうに広がる青空をめがけて走る三歳の孫は

岩本 愛子

雨止みて道の窪みに水溜り空と電線深く映りぬ
城光寺野球場への坂道を駆け上がる十二時五十分

内田 くら
遠藤 玲奈

道なりに五分歩けば着くという竹馬の友が待つ居酒屋に

小川 亘

寄る辺無く風花舞うをエトランゼ道祖の神に手を合わせたり

五味ひづる

夜の闇をぬいて白鳥舞い戻る野分静まりし朝の畦道

斉藤 恭子

いにしへのシルクロードは絹の道われ着るシャツはユニクロのシャツ

櫻井 司

砂漠道・獣道あり都会道オアシス探し歩き続ける

佐藤 春夫

蠟梅で右折、満作で左折して山菜夷の咲く道の辺へゆく

澤田加津子

雨に咲く白い花々辿りつつ図書館経由蕎麦屋への道

杉原 真実

真つ直に西に延びたる道の果て夕日が山の峰にかかれり

鈴木 晴子

銭湯へと久々歩む夜の道迷ふ辻より木犀香る

関根ミサ子

笹塚の十号坂の道の途中通せんぼする柴犬のコロ

中村 美脈

きん木犀の枝払はれし坂の道今年をあへず甘き花の香に

廣部 周子

切り方の道理に従ふ植木屋は空明るくす木枯らし近し

藤原 千賀

畑道の無人売場で三百円赤く大きなとまと五個買う

細谷 悌子

雪折れの道ふみしめて夫と行く大沼せましと鳥の群れ居る

向山 涼子

小田急からJRへの坂道の坂を感じる六十八歳

渡辺 進

神奈川県

平然と夜空に光投げながら争ひやまぬ地球とふ星

青木 君子

風船は手から離れて飛んでゆくどこへ行つたか 私の夢は

松村 輝代

ストリートピアノに「ふるさと」弾き終えてすこし照れてる老人のあり

いいだらうら

幼兎虐待死のニュース観るたび怒りと悲しみが子供三人育てた妻と

碓井 功

亡き夫の育てし椿「雪月花」令和初年を蓄出揃ふ

遠藤喜久子

スキー板テニスラケットきつぱりと捨てて揃いのスニーカーを買う

大曾根藤子

動物としての本能人間としての品格ブランドの妙

笠原 隆司

甲子園夢見て励むブラバンをいつか連れてく母校野球部

笠原 隆司

花びらを描くが如く繊細に銃のトリガー引く夢を見き

加藤 民人

もういいかい血圧計に聞いてみるあれから七年ステント手術

西田 陽子

ガラス越し時空を超えて鎮座する正倉院の五弦の琵琶は

西田 陽子

石路の黄の花ともす淡き灯に己が心をしんと見つむる

金子 裕子

千本の露の匂ひを屋外まで漂はせ煮る自慢の佃煮

河瀬 ツユ

速贄の高さを測りこの冬の雪の深さを憂う古里

小平 貞

陽の匂い窓に溢れてとどまらず亡夫のカップに珈琲充たす

清水 恰子

いぬたでの花咲き続く近道を夫待つ家へ急ぐ夕暮

杉山 藤子

GNP奢る令和の列島に地震・出水の試練降り来ぬ

鈴木 経彦

ひまはりの冬に黄の花畑に満つここの前は寒川神社

高山 克子

赤子だきおさな手をひき背にリュック若いママさん国の礎

武市 治子

見つめれば流れゆく雲低くして動かぬ雲は上にありしを

田部井清子

消息の途絶えし友をふと思ふ伝のなきまま七年の過ぎ

七田れゑ子

蓮の花はなびら閉じることなくひらりひらりと水の面に散る

鳴瀬 弘美

悪阻すら愛しく思ふ秋の日にひと匙ひと匙お粥を掬ふ

濱中亜璃沙

所杖つき休む亡き夫と散策コースが日課となりぬ

久島 秀子

臥所まで金木犀は匂い来ぬ思い出させる夫の命日

府川ハツエ

雨上がり緑葉の中ほっこりと紅き灯ともす山茶花二輪

牧野 艶子

歳の瀬の掃除しながらさらうのは百人一首あ行からなり

見山れい子

リストラに引き算の美学まなびたり賀状を絞る喜寿すぐる身は

大和 嘉章

市議選で次点に泣いたポスターが笑顔で残る富士見二丁目

渡辺 昭宏

午後一時空の翳りて唐突にすだれの様に頻り雨降る

渡辺 勲

酒気おびた吾の如くにゆらゆらと夕暮れ時に蝶の舞い出づ

渡辺 勲

花の蕊輝く見れば花ささえも自が心根を吐露するごとし

綿貫 昭三

.....題詠.....

獸道我が家につづき猪は蚯みみずもとめて突如顔出す

石川 達見

墓所までの道をゆつくり上り行く山茶花はらり天高く澄む

遠藤喜久子

家並も人も替われどけんけん遊びし道はあの頃のまま

大石 知子

日の暮れて見えなくなるまで遊びをり路地の四つ角缶蹴りの場所

岡 彬

わが過去のひとこまに一本の道ありき曼珠沙華の花赤々と咲く

片野 哲夫

鉄のまち潮を被ったアスファルト親子の鹿が呆然と立つ

北島 秀秋

お互いに傘を傾け行き違ふ暮れの歩道は時ならぬ雪

小平 貞

歩くより楽と八十路の叔母の漕ぐ電動自転車坂道上る

内藤 洋子

霊園の説明会の帰り道 黙して夫と石段降りる

七田れゑ子

バス停の同じ位置にて媪らのそれぞれの眼で芙蓉を見ている

鳴瀬 弘美

峠道新緑の中バス停に軀バス待つバスはいつ来る

長谷田光代

解決の道すち立たず三年経みつとせついたらに調停をかさねせしまに

藤本 令子

健診後ベビーカー押す坂道は命の重さを腕で感ず

松浦 洋美

震度七に道内なべて停電す大きな空に星の煌めく

渡辺 勲

新潟県

タクシーを表に待たせ妹を見舞ひて兄は急ぎ帰りぬ

酒巻 幸子

山あいの義父の勤めた小学校新幹線に乗るたび眺める

関根恵津子

首里城の崩るる瞬間音たててわが手のグラス木端微塵ぞ

建部 清子

令和の世の若きに語るハニホヘトイロと歌ひし戦中のこと

土田 淑

亡き夫がのこしてくれし花壇なり真珠の花々見えますか夫よ

津野 サエ

ハンドルを握る手一氣に軽くなる今朝の海色 青よりブルー

原 真弓

紅葉せる三面川を溯る鮭をねらひて居練網打つ

坂西 直弘

小学校にしまふくろうの絵本よむラジオに聞きし鳴き声まねて

三浦ユリコ

豊作を歎び祝ふ田楽舞踊る若衆に小春日温し

目崎 政成

.....題詠.....

出生の九十万人割るといふ国の行く道霧たちこめる

折居 伸

空の道間違ふ事なく白鳥はこの地目ざし来のどかに遊ぶ

木ノ瀬厚子

除雪せる道を外れて新雪に踏み込み遊ぶ下校の子等は

佐藤 満枝

じやり道とたたかいながら妻がゆくシルバーカーに体を預け

鈴木 陽吉

地下道の長いホームの人波に路傍の人と無心に歩む

関 テル子

デコボコの4つの影の散歩道「ゆうやけこやけで」影も歌いて

原 真弓

水雨降り欽仕舞いして一礼す棚田の道は雪に変わりぬ

堀口 良作

白鳥の風切る音の遠退とほそきて原発道路に入日影浴む

若月 昭宏

富山県

猛暑日が続くだだ今昼下がりに救急ヘリが頭上を急ぐ

池田 正男

青春と言うには少し物足りぬ胸熱くなる遠き日を持つ

石浦 好代

寝る前に般若心経唱えるといつから居たのコオロギ和する

石浦 好代

スムーズな器具の響を聞きながら冠動脈の手術のをはる

市川 弘之

夕食のおばさんと呼ぶ利用者の褒め言葉聴く虹色の日々

上堀由美子

家族増えなにかふわんと甘やかな香のする家に若返りたり

浦上 紀子

来春に祖先の年忌法要予定あり障子張り替え心を込めて

大西 邦子

孫娘こどもと共に成長し優しく強き面立ちと成る

國香 悠子

夕焼けがあまりに赤く照らすからブラックホールに吸われる立山

高野 佳子

届くかなシンガポールに南砺の秋を兄の面影残せし甥に

藤田あや子

雪吊りの志木幹に男結び締めて吊り縄枝枝に張る

吉井 敬三

.....題詠.....

懸命に昭和平成生きました多分令和も八十三は

石浦 好代

一日を生きればひと日消えるなり無駄にはすまい残り世の道
振り向いてまた振り向いた先頭の子に続き行く登校の子ら
道の駅正月用品満載で兄さんダミ声焼芋匂う

石川県

神々しき夕光^{ゆづり}享けし家々はやがて薄暮の墨絵となりぬ
鈴振れば儲かりますと声降りるAIですか賽銭箱に

青空に円錐作り繩走る胸張る松の雪つりの朝

でこ・ポンが好きとふ声が愛媛まで聞こえたるらしカタログの来つ

エックス線写真にうつる白き影磁気絆創膏のほかにも何やら

亡き姉の植ゑし菊花その娘摘みわれらあと行く日暮れの墓地へ

雨にぬれ庭のもみじ葉色増して曾孫の誕生祝うがごとく

朝を行く二輛のリズム健気なりいつもの人を満員乗せて

……………題詠……………

負けまいと口論になる老い二人声だかに道まだ遠し

ふる里の野道に秋津群れ飛びて吾の肩へと停まりに来たり

福井県

夫の掘る長いもごぼう慎重に赤子抱がに台車にのせり

伸びざかりの女の孫そつとわれに寄り背比べをなすランドセル背に

足衰えの辛きりハビリなし終えて八十路の吾は明日に向かいぬ

永和寺の黄葉^{もみぢ}かがやく大銀杏雲をつかみて天に広がる

……………題詠……………

連れ添うて九十の坂道登りゆく目指す百歳み仏の里

四十年住みたる吾れより堂堂と里の道這ふ芋虫見たり

石浦 好代

浦上 紀子

大西 邦子

飯田 世三

越田 峰子

越田 峰子

但馬 信勝

橋本 枝折

髭本 栄健

堀 久美子

馬淵みや子

織田 健治

堀 二郎

木下 豊子

堀内 恵子

堀江小枝子

山村 輝子

笛吹 稔雄

落合美予子

山梨県

晩秋のしぐるる嵯峨野寺巡り池もみじも墨絵のごとし

飛行機へ乗れる夢みて志願した特攻少年の母への手紙

乏しさもさ程苦にせず走ったは昭和男の誇りと自慢

大人でも留守番なんかつまらないみかんを食べるひとつころがし

……………題詠……………

雪道を乳飲み子背負いゆくような父の戦死で母の人生

いつとなく卒寿も越えた道遙か振り返りゆく我も旅人

長野県

彼岸用小菊の出荷終りたり御礼肥して冬芽待ちいる

木枯しの途絶ゆる朝小一に「葉っぱのフレディ」二十分読む

古木なる実家の庭の甘柿の味なつかしと弟と言ふ

吾が庭の菊の種類は十あまりあの友あの庭よりいただきて

人ごみに知る人をらぬこの街がさびしきことよ我のふるさと

物も無き時に生れて物多き時に買ひ過ぎ今断捨離か

故郷の夕焼け空を飛行機に乗せて送らむ君住む街へ

高潮に浸かりしヴェネツィア五ユーロの長靴はきて大鐘楼見あく

マチユピチュでNHKに釘付けに。我が故郷^{ふるさと}が水没している

頼られて苦しきことのみ多かりき義父の介護は火宅でありき

木守り柿いつしか熟し鳥突く軒端は揺る干し柿簾

読み聞かせ月一なれど子供らの無垢なる眼^{まなこ}にあえる幸せ

「とっておけ」何でも捨てぬ夫といてサッサと捨てる我のおかしさ

中卒で八百屋に立つ級友は高校に通うみなから目逸らす

北風に負けじとフード深くして足を踏みだす師走の街へ

大森 和男

三浦 信子

宮坂 延雄

渡辺さちえ

三浦 信子

宮坂 延雄

井澤 幸子

宇都宮英子

清原由紀子

近藤 浩子

関 啓

関 啓

田中 純子

手塚 一子

川村 咲良

中根みち子

藤森 弘國

牧田 妙子

水間喜美子

山崎 英介

吉田フサミ

.....題詠.....

足腰がご機嫌よろしこの朝は回り道して散歩してみる

市川 光男

収穫の白菜に付き来たるらし斑点愛しき天道虫よ

清原由紀子

此の道に腰下ろす石一つあり春には桜夏には木陰

後沢 恒子

公園に入り行く道に人気なく時決めしか鳥の声止む

松崎 歌子

岐阜県

リユックサックに長寿のお守りそつと入れ娘のやさしさを背負いて歩く

稲葉 久子

娘のしぐさ亡き父親のそのままに収穫終えし畑土を平す

今井 きみ

いつてらつしやいと子を送り出す日常も残るは二十日秋風の吹く

岩田 文子

言の葉の裏と表のくるくると視線の揺らぎを捉えとする

江尻 恵子

毬栗が弾けて落ちるガンですよ夫の余命二ヶ月と告知

川出香世子

出勤の孫の持ちゆく握りめし今朝は具をかへ二個皿に置く

曾我富美枝

留守の間に太り過ぎたる長茄子を焔焔に焼けば夫の喜ぶ

塚田いせ子

舌の先にひとつのど餡ころがして冷え著き夜の風呂焚きにゆく

塚田いせ子

過ぎ去りしわが青春は六十代夫と登りし劔岳よ槍ヶ岳よ

永井 久子

時として指先の力緩くなり今日は小皿が足許に居る

中村 紀子

内緒だよいつつ犬と半分つこアイスクリームに猛暑を凌ぐ

細井 迪子

睦み合ふ男波女波の渚ゆく夕日に向かひ孤影を曳きて

松尾 東一

蚊のゲリラの先鋒二匹は脛廻り隊長らしきが首狙ひ来

松尾 東一

着替えたる夫の野良着は汗臭し病知らずを今日も貴ぶ

本山 順子

思ひ出のポロトコタンを唄ひつつ民族衣裳に名残の温み

吉田 順代

.....題詠.....

譲り合いつつ行き交う畦道「おはよう」と互いに笑顔今日の始まる

磯貝 薫

今朝もまた犬に引張られ朝散歩乗鞍風に向けて道ゆく

稲尾 重雄

どくだみとしその香ただよう真昼間を坂登りゆく我が家への道

岩田 文子

「どうしても帰りの道が解らん」と抗痛剤治療の夫の電話

塚田いせ子

古代より人馬往き交いし中山道 今朝賑やかに外国人ハイカー

塚田いせ子

飯桐の赤き房実の枝揺すり裏木曾街道きさらぎの風

古井富貴子

迦陵頻伽に耳澄ませいづれ歩まむ百花繚乱普陀落の道

松尾 東一

移民受入れ是非論のカーラジオ聴き金鶏菊の猛し道邁く

松尾 東一

若き日に子らと競いて駆けた参道孫の護符手に妻と下りぬ

山田 恭三

足もとの蟬のうがちし穴道へするりと割箸一本消ゆる

吉田 順代

静岡県

浅学のわれに一芸の短歌道入口狭きもこの道をゆく

えま 章

ひこばえの稔りし稲に寄る雀めぐり気にせずゆつくりお食べ

落合登美江

夕暮れて豌豆のすじ取りおれば何気なくふと答出できぬ

坂口 ちせ

欠かさずに花買うてくる独り身の姉の背丸くなりしと思う

坂口 ちせ

植え忘れのチューリップの球根陽を恋ひてむにゆと出た芽象牙のごとし

塩澤 歌子

昏みゆく晩秋の空の夕茜青春の日のさびしさに似る

柴 親子

門前に影を落とせし百合樹の秋深まれば揺るる木洩れ日

杉本 弘子

さわやかな山の気を吸うみかん刈りなれぬ手つきでチョコキンと切りぬ

鈴木 久子

さりげなくうぶな私を捨てた人艶歌みたいな若い日あった

田村 姓子

やれやれと八十路に入りての気の緩みふと迷い込む未熟さ悲し

野村 脩二

若き日のもがきのごとくたわみおり疾風にゆれる櫛の道は

大庭 拓郎

椎の花のほひこもれる雨の日の苑の小径よ青葉が重し

笠原八代恵

吾が道が曲がりくねった言い訳は照らす明かりが暗すぎたから

田村 姓子

愛知県

今は亡き弟にかわり京都まで合否発表桜咲くと打つ
恐竜の絶滅の理由検索す猛暑のつづく敬老の日に

極まれる異常気象の温暖化冬の立つ日に夏日と記す

地平線雨戸あければ日が昇る当り前でも幸せなこと

悲しみは少し遅れてやって来る逝きたる友の動画を見れば

たがやしが浅き畑の大根はわたし似なんだそろって短足

秋祭り待ってましたと露天商ねじり鉢巻き景気をおお

痴呆なる愛犬エルの糞なれば素直に取りて犬小屋洗ふ

刻々と死の冷たさに移りゆく老衰犬を擦りてをれば

宛て先は日本海の蜃気楼手紙だしたり春霞の日に

見ていてと縄跳びする児の傍らにわれも体を弾ませており

悪い事ばかり起こると言う夫に良いこと教え上げる 私は

透析で命をつなぐ週三日残る四日を無駄には出来ず

「赤いくつ」の呪縛解けずに今もなお赤いパンプスはいております

三匹のタカアシガニがからみ合う阿修羅が阿修羅を抱くことくに

かく生きて明日は如何なる日のあらむ逝きし息子を追ふ流れ行く雲

白髪をはじめて剃つてくれし息子にベッドの夫は両手を合はす

傾ける体の縁を風触れて保津川下りの飛沫を浴びぬ

満州で御針を習いし老母は四人の孫の振袖縫いくれし

二度同じ話する人一、二、三、四人はみます私のまはりに

雨傘の先より車内の床に伸ぶ紙魚の食ひ跡のやうな水すぢ

玉入れの六つ七つと沸き上がり一瞬しんと勝負はどっち
一年を探し疲れて隠れん坊遺影に誓うあなたと生きると

安藤 駿

伊藤 貴久代

伊藤 忠男

伊藤 忠男

今泉 一夫

大島 陽子

大塚美千子

大成 金吾

大成 金吾

笠井 忠政

近藤 峯子

島田久美子

清水 将一

添島貴美代

高橋みどり

都築婦美子

藤田 隆子

牧 正吾

真野 勝子

三好 ゆふ

三好 ゆふ

村瀬登美子
山口 昭美

田の畦に群れつつ靡く芒の穂白い穂先は手袋のごと

イヤフォンし周りに見るなき少女らよ明日の天気を教えておくれ

.....題詠.....

ぼっくりにだらりの帯の舞妓さん下りの坂道すたすた歩く

礼文、利尻、留萌、札幌と北海道行けば「ら行」に呂律まはらず

道端のカゴにカリンの六個あり「自由にどうぞ」と袋を添えて

車より降り立つ道の辺ふうわりと金木犀のはなの香満ちぬ

乳母車に歩けぬ犬を乗せしまま歩道をゆけば悲しみばかり

老死せし犬と歩みし坂道に夕焼け雲の薄れゆく見る

「勝利への道はこのみち」桶狭間の戦場ガイドが語る信長

叱られて飛び出す姉を追いかけて二人で帰りし落葉の小道

病院より桜の道選り降りたり好意に甘え棺と共に

道端の一円玉が目に入りてはつか迷いて手を伸ばしたり

友Kが夜勤帰りに注意せし願書の期日がわが道変えぬ

わが内にありて知らざる産道をこの世生きんと吾見出でこしよ

行くみちはいづくにあらむ幼少に父母を失ひ探りたる道

家出した夫は車で道の駅一晚過ごし朝帰り来る

公園の道に白線カーブして昨日のマラソン熱気の名残り

散歩道金木犀の甘い香は遠いむかしのかくれんぼの香

カーナビは案内忘れしごと黙す道内貫くひと筋の道

いくつかの橋を渡りて道をゆく八十路のわれにある向う岸

ほほえみのような紅葉の熊野路に二十歳の恋をふと思いつ
ひさびさに供花携え妻と訪う蓼蓼の道の風の冷たし

山口 郁子

山口 竜也

伊藤 忠男

上田紀美江

江崎ヤヨヒ

大澤 紀子

大成 金吾

大成 金吾

近藤輝久江

酒井 彌生

添島貴美代

添島貴美代

中根 英一

中村佐世子

羽生由紀子

原田 熙恵

真野 勝子

真野 勝子

三好 ゆふ

森下 貞子

八木ゆり子
湯朝 俊道

三重県

新生児の泣き声辛いと打ちあけぬ卵巣とりし娘は我に
野良猫が何故か後ろを付きまとう納屋を開ければ子猫三匹
故郷来て一面星に僕一人鼓動の音が生きると叫ぶ
目の前のベストを越える高さにも動じず跳んだパー揺れる夏
音たてて伊賀の堅焼食ふ夫その小気味好き音をうらやむ
秋に入り健康講座人集う帰る姿は背すじのばして
……………題詠……………

風の中ペンペン草にリボン巻き測量士等は畦道を去る

窓際に道ゆく二人の声聞こゆタイ語だらうか楽しさうなり

最高の仲間と共に楽しんだ書道パフォーマンス甲子園

通院する道は七坂八曲りまわりの山は紅葉美し

木梢まで百か千かのせみのから道つくりつつ大空に飛ぶ

滋賀県

蒲生野の空は藍色まさやかに祭り囃子の風に乗り来る

チョーク手に古典板書の大先生係り結びを教へ給ひき

京都府

大輪が咲きしと妻が告げにくるたそがれの狭庭夕顔の花

米寿すぎ月日経つのが早くなり想いは還る家族ありし日

濡れながらたどりつきたる山里は紗よりも淡くたつしぐれ虹

顔を前にかたむけあゆむひとだった 石ころひとつころがりて

時過ぎて町が変わってしまっても変わらぬものはそこにありけり

幼子とひざ痛きわれと二人して手をつなぎゆく守るはいづれ

安里 檀

内田 雄亮

小林 寛久

小林 寛久

村松とし子

森田 晴子

秋田 彦子

安里 檀

小林 寛久

中野 千鶴

森田 晴子

岡本 安男

東 佐久良

小林 三原

阪根まさの

戸嶋智鶴子

中島扶美恵

さくら

物部萬里子

……………題詠……………

道草とうことばも遙か送迎のアンパンマンが見らをのみこむ

八十年前に遊んだふるさとの浜に出る道ひ孫が駆ける

くちなはを追つ払ひつつ畦道にあづきを植多し終戦の夏

故郷ゆ若狭へ向ふ街道は老富を越え原発立地に

穏やかな風に誘われ道ふさぐ萩の花咲く夕暮れの里

中国道車窓に流れる山肌の錦紅彩に深き山並み

道の辺の荒草に淡き日の差して蟠螂ひとつ風に吹かるる

大阪府

傘寿祝選びくるるか夫と娘のライン交換知れども言わず

あかつきの戸口に來たる新聞の雨を防ぎてビニールに包まる

リュウグウの岩を持ち来るハヤブサの宇宙の謎解き令和につづく

閑空の闇夜の窓外見おろせば寶石箱の神戸が傾ぐ

冬ざるる閻魔堂なれ幾重にもくゆる香の罪業映す

「かぜひくで百かぞえるまでぬくもりヤツ」祖母のしつけが喜寿になっても

水仙の芽が吹いたから皮むきを始めなければ干柿作りの

せかせかと師走の町の雰囲気に一人居吾もとけこみ歩く

みくびりしデイサービスにあな思ふ教はることに恥辱を濯ぐ

生真面目で堅物だった倅がいま新婦と歩む満面の笑み

ひ孫たちひざに乗つかりもたれくるそのやわらかくあたたかきもの

近江 瑞子

奥田 真人

小林 三原

角山 治雄

西村 修

平松 隆

物部萬里子

新 恵子

太田 富貴

金子 公宥

金子 公宥

篠原 節子

北大路高見

北大路高見

竹内 治枝

辻 須美子

純ちゃんパパ

藤沢 千鶴

山下 道子

山本 達

吉井亜紀子

………題詠………

彼岸花の朱の浄土の畔道に君とわけあい塩むすび食む

満願の熊野古道を描きおり絵筆に秋の彩ふくませて

道端のカラスノエンドウ鞘黒く種をはじきて反り返りたり

登り道にまつ赤な桜落ち葉あり一葉拾ひてくちびるに当つ

稜線が緩むまひるは駅までをゆつくり歩く 道にたんぽぽ

志半ばで倒れしひとありて無言の帰国アフガンの道

水道の蛇口ひねれば水が出るこの当たり前に被災地思う

兵庫県

丸く抱く診察前の待合室番犬の震え震えるを抱く

育ちたる家もとおりて庭隅の露草やさし時空をかける

燃えさかる炎はいつか紫に余熱に浸る須磨の火祭り

散りかけし花に一つの生命ありそつと触れつつねぎらいかけぬ

千両は日向と日陰の実の色を濃くなることに違えてゆきぬ

天へ、とも急勾配の三十段をほつほつ杖に百三歳が

カーテンのすき間に冬の青い空かもめを一羽天が誘う

乳を欲し泣くみどり児のあえかなる声せつなくも留守居の夕べ

田の小豆尻受けて茎枯らし今か今かと人の手を待つ

便利さの奥に潜める黒き毘嵌らぬようにスマホと遊ぶ

新築の家売り出して一ヶ月今日は百万下げて標示す

流行におくれし服を今様に仕立て直して街へ出て行く

待つ覚悟きめて開いた文庫本それでも気になる診察順番

「ここだよ」と自分の声に目覚めたり亡き息子が夢で手を振つてみた

南庭に金柑みかん柚子ザボン師走は金色正月を待つ

新 恵子

新 恵子

金子 公宥

熊ノ郷紀子

佐久間雄二郎

山本 幸呼

吉田 昌子

伊藤 美鈴

乾 外志

大井 順子

岡田美代子

荻野 洋子

小野寺徳子

金田 益美

北原 嘉子

上月 昭弘

齋藤恵美子

杉岡 静依

立田由里子

西村 紀子

福井 弘子

前田ひさ子

過疎進む里の憩いの場所だった馴染みの店に閉店の文字

梅の木にすがいの目白が訪れて今日のよい事これが二つ目

………題詠………

道端のアゲハの骸を手にする花にのせたる遠き日の亡妹

草もみじくるりまわれれば穂すすきの踊る山裾霜月も末

誘わる山道ゆけば静けさの木洩れ日ゆるるせせらぎの音

頑に跡継ぎ拒みし僧侶の道袈裟、衣付け二十年過ぐ

不精鬚似合う青年般若経草凜とし遍路道行く

ふるさとの道の駅にて思わずも友の名札の白菜抱きしむ

今あるがままの幸せ忘れもの三つ四つあれど坂道下る

山越えの有料道路の無料化に山の紅葉ひときわ映ゆる

朝風をつめたき道を足早に行けば命のひらく音する

穂芒の靡かふ道を風邪の熱ある身ふはそよぎつつゆく

山畑へ小さな体の駆けて来し茅花の道に吾子の顕ちくる

アフガンの未来夢見た哲さんのつくった水路は今も流れて

奈良県

脈取らず聴診器も持たぬ担当医画面を見つつ結果のみ告ぐ

「ふり向けば幸せな時代でしたね」A Iの美空ひばりも私たちも

母の声聞こえしやうなと振り向けば雑木林にさるすべりの花

ふあいなるの同窓会の返信に「出席する」をはじめて丸す

………題詠………

葉の香り木洩れ陽まとい走り根を避けて「上の禰宜道」たどる

和歌山県 「しあわせか」「うん」と答へてハッと起くあれは確かな「夫の呼びかけ

前畠 一博

松浦知恵子

乾 外志

小野寺徳子

北原 嘉子

笹津ちよみ

佐保田明子

末澤千世子

高田 時子

竹内 安子

竹内 安子

濱 守

福井 弘子

前畠 一博

勝山小次郎

平尾はるみ

山田榮美子

吉村 文男

吉村 文男

田部 董

岩崎 晴代

岩崎 晴代

霜月の朔日寅の刻静か音なく気温一度低下す

大河内喜美子

ばさばさと荒つぽけれどプロの手にかかれば庭樹姿勢を正す

小田 実

たんぼの絮はるかなるオスブレイ雲ひとつなき熊野の空の

木下 正博

「今日二度もあなたに会えて嬉しい」と友の言の葉心にそよぐ

小山 睦美

豊満と肥満の違いどこだらうルノワール見て我が身を眺む

中尾 加代

近ごろは待つてくれない歳月を追い越しそうに吾は老いゆく

中嶋 陽美

水争ひ何時しか消えて改修の水路は満たされ潤ふ稲田

中村 照美

新古車は十五年間故障なく気の向くままに熊野路駆ける

野上 恵子

……………題詠……………

人の道とほとほと来てゆるゆるの八十六をのれんが招く

小田 実

秋の陽の消えし山道畑よりに祖父と帰りし思い出遥か

木下 昭一

乾きたる柿の落葉は軽やかにステップを踏む風の舗装路

木村 召子

下手でよい下手がよいのよに乗せられて絵手紙の道に踏み出す一歩

菅原 清美

彼岸花残して畦道刈り取られ赤の連なる小道明るし

中村 照美

道史道にレンタカーを走らせる地平線まで阻むものなし

野上 恵子

ドアのノブ廻せば開く未知の道A I通りぞいざ通りやんせ

村上 利彦

人葬りそくそく帰る畦道に赤い灯ともし彼岸花咲く

山田 則子

鳥取県
出刃庖丁キッチン鉄めん棒と女を守る形の厨

荒井 玲子

山路来て仄かに香る笹百合に心の憂さはうすれゆくなり

市場 和子

癒えし身をワルツにのせる友の背のくの字のライン輝き増せり

長谷川和子

今の世は一夜の夢か千年の歴史の果ての世界や如何に

柳谷 保

いづくにや日本のこころ今あるはモノとマネーと車ばかりぞ

山家の蛙

……………題詠……………

代わる代わる友と山びこつくりては遊びし柚道草の茂れる

黒見 明子

苔むせる石に刻まるる道しるべ いにしえ人の安堵の声聴く

長谷川和子

島根県

西空の雲は幾重に棚引きて茜色さす妙なる夕暮

内田 充子

この坂を登ると空に届くごとと神立橋へアクセルを踏む

小村ミチ子

「理加さんとの結婚お許し下さい」と京都よりの青年衿を正せり

熊谷多賀子

目の前を光り横切る鬼やんまありてヒトなき頃の明るさ

田中 勝美

声変りせし汝がわれのなじみたる笑顔でみやげの八ツ橋くるる

田中 勝美

赤の群れに個性をようやくあらわして白曼珠沙華独立したり

田中 勝美

独り居の飯よそう夕滞る救急車の音きこゆなり

田中 勝美

文科相はあわれ裕福「身の丈に合せて頑張れ」受験生に言う

田中 勝美

ちよぼ口のごとふくらめるチュウリップ冬の花屋に出番待ち居り

花田 敦子

冬晴れの昼時老母とお茶時間浮き雲窓よりのぞき込みたり

水口 清子

……………題詠……………

ひつそりと道にわが影ひきながら同い年の通夜を悼み戻りぬ

熊谷多賀子

街路樹の影より今日は日のあたる場所選りてゆく蟋蟀の啼く

田中 勝美

この広き空にも道のあるらしく白鳥の飛来今年も仰ぐ

松本千重子

岡山県

難儀なる介護ぐちつつ暮らししが恋しき日々といまは思へり

石田 薫子

「このお歳で手術は」画面に言う医師の高級そうな眼鏡フレーム

大武千鶴子

さあ抜いて食べてみてよと白き肌地上に半分さらす小春日

大畷 允子

遠き山にまつ赤な夕日の沈みたり明日は娘に手紙を書かな

茅野 和子

趣室は「ぬるいサウナ」と蔵人Aは四十度の中趣をほぐす

菊池 眞理

バラードをBGMにして眠る 母と再会できたらいいな

稔田のうへを捕食の秋燕しつかり喰つて力を溜めよ

淋しいねと白秋の風に問ふならば君は遠くで相槌をうつ

朝なさな園庭で遊ぶ子らの声泣く子笑ふ子混じりて居間に

街路樹の楓の葉散りてあらはれしホームの壁のわが野良時計

せはしげに牛膝の葉を這ひまはる天道虫の赤のきはだつ

.....題詠.....

誤字なきか文法よきかと推敲す歌道は楽し晩学なれど

夕闇の迫る坂道リュック背に中学生は自転車漕ぐ

守られつつ登下校する幸せで不仕合せなら道草を知らず

すすきゆれ葎の花ゆれ心ゆれ楽しきことのみ思うて生きむ

萩、コスモス日々新たななる花の見ゆ敷川に沿ふ野道ゆけば

どの世にも道を逸れたるものの居て列に遅るるかりがね一羽

道の辺にせつぶん草の白き花咲きをれば春の近しと思ふ

みぞれ降る比叡の山に虹の道たどれば会える二十歳^{はたち}の私

今朝もまた道辺の石仏に手を合はす露にぬれぬる小さき石仏

夢の中時々浮ぶは父の顔歩む道をば示してくれる

広島県

ドラマとはちがうだねとオペ室に向かう廊下を並んで歩く

遠火花の音を聞きつつ佇めば火照るからだを夕風の過ぐ

爛漫とそめい吉野は空にあり植えし亡父と共に眺める

憧れのナイアガラに着きし今二国にまたがる虹が迎える
「それから」の次の言葉を気にしをりそれから逃ぐるかそれから生くか

小橋 辰矢

高原 晴子

逸見 素行

三宅 照司

森 富美子

若林 和子

池田 邦子

石田 董子

大武千鶴子

大巽 允子

茅野 和子

高原 晴子

辻岡 幸子

藤原由紀子

宮本加代子

安井 孝誌

上田千津子

小白 照子

田頭 律子

田頭 律子

和田 紀元

.....題詠.....

枯草を炎はなめて道となり春を待つらん九重の丘は

三次人形^{あか}朱き衣の道真公円形に並び絵付けされ行く

山口県

離婚する気持はきつとこんなだらう名取も捨て書く「退門願ひ」

唐辛子を玄関に下げ厄除けす遠く見ている死ぬということ

遙かより呼ばれ麻酔の覚めたればほつと和らぐ夫の眼に会ふ

眉尻の乱るるままに描き終へる抗癌剤の二回目の朝

首里城の炎^{ほち}映すか茜色あやしきまでの晦日の黄昏

雨粒の最速降下曲線に仏閣の屋根傾ると知りぬ

亡き父の歟ふる姿見えそうな耕作放棄地につくし群れ立つ

知らぬ児をママが抱きて傷心の二歳にならぬ孫は涙目

「阻止する」と村人は言う設置さるるイージス・アシヨアは騒動起こす

汚い場所奇麗にしているモップだから美しいはずと絵に描く掃除夫

年としの夫の命日に届きたる花は少しづつ色数増しぬ

つやかなたつた一つの黄金の実 柚子が初めて実を結びたり

ズル休みしてをり金魚みつめをり遠くに一点青空があり

われのため歌詠むために座ります何はさておき朝の一時間

行きずりに語り行く行く登校の男児は親のりこんに気づく

.....題詠.....

誰も居ぬ生家へ続く分かれ道往くを拒みて秋霖熄まず

六車線をうづめゆるゆるゆく車一台として浮き上がるなし
吾が膝をさすりて思う痛むまで歩きし七十余年の旅路

廃村の道に放せる空の瓶土を拭えばくきやかな青

景山 明見

平越 玄頌

池水 佳子

石井久美子

岡 芳美

岡 芳美

田原 隆行

弘兼 安雄

弘中 光子

安野たかし

松浦美智子

松浦美智子

三牧 信子

森田アヤ子

森元 輝彦

山縣満子

山下 咲子

岡 芳美

森田アヤ子

山口 弘子

山本アサヨ

徳島県

引き籠る老人なれど貰いたる柚子を浮べたり冬至の風呂に

小畑 定弘

……………題詠……………

草群に一筋の線見えはじむ我のみ踏みゆく畑への近道

荒岡 清子

香川県

ああ愛に溺れるヒールを沈ませる砂の続きに架かる大橋

氏家 長子

年末の掃除に参加せぬ夫のスマホゲームは今佳境なり

みよしすみこ

朝まだき午前三時の静寂を掠めて新聞バイクが走る

森本 義臣

……………題詠……………

わが庭に猫の道なるものありてマーキングするボスの縄張り

みよしすみこ

愛媛県

うわさ好きか敵か味方が慎重に窺うはじめての美容室

宇都宮朋子

地獄のやうな猛暑が過ぎて心満つぶだうが匂ふ芒がそよぐ

岡田千代子

カーテンに影をうつして春の陽に雀が遊ぶ庭の梅ヶ枝

窪田 憲二

壊れゆく自我にあらがひ歌にせむ米寿迎へし日日の暮しを

末光美恵子

肌を刺すビル風の吹く校庭で湯気を立てつつ子供は遊ぶ

園部 淳

糸玉を解かせ細らせ編みし日の母のまぼろしセーターに見る

藤堂 三郎

父母を舅姑おぢおばを夫を送りたりだあれもないわたしのうしろ

前田 充

F Mのジャズ聴き居れば窓外に唱和すること叫ぶ小綬鶏

山口ひろむ

……………題詠……………

病もつ娘むすめがかえり行く「また来るね」路地まがりつつふり返る笑み

安部ヨシ子

火の鳥のシートに包まれ改装中の道後温泉インスタ映えとぞ

宇都宮朋子

夫逝きて一人で生く道安からず情がほしい啾啾の夜は

岡田千代子

大川の土手に連なる彼岸花散歩の道に赤き花燃ゆ

窪田 憲二

高知県

再検査待ちいる我に幼子が笑いかけて来話しかけて来

岡松 模子

今年またアサギマダラを幾度いくたびも迎えかがやき咲く藤袴

田鍋 榮子

少年は幼き弟おとを背に負ひてひとり戦禍の跡に佇む

平地 俊雄

ひとつだに雌花にあえずいくつものへちま雄花の黄色の萎む

福富奈加子

今日もまた頑固な吾を和ませるバナナ持ち来る三歳の笑み

山中 直美

そのかみに果てし利久の血の色か佐助の花ぼたりこぼるる

若槻 筆子

……………題詠……………

坂道を速度落としし軽トラは生姜の香りふわりこぼしぬ

岡松 模子

福岡県

きつぱりと晴れたる空の広がりにて秋葉莢の花ふるふる盛る

市川登美榮

吹き寄せの落葉の中より飛び立ちし小鳥は空の高みに消ゆる

入江 洋子

家中に「チガラミコウカン」触れ回りぬし子は四十父親となる

上野 洋子

渋柿の皮を剥く手はごつかった細くなりけり父の指先

加茂美佐緒

砂浜に打ち棄てられし浮子に掛け尖るころをなだめて歌ふ

岸原 修

二人して遠目薄目に骨ほぐし無言のままの秋刀魚の夕餉

小谷 清子

忘れぬ電の降り頻く音たてて火の雨覆いし空襲の夜

笹淵 雷虎

樅の木まの枝葉の影がうつりて朝のカーテン子ら踊るやう

中村 久恵

娘むすめと二人ひたぶるに生き夢だにも来ぬ亡き夫の明日五十回忌

楠崎タツエ

古寺の境内に散るもみじ葉は杖の老女の髪に止まりぬ

藤本エツ子

護摩焚きの火柱あつく頼照らし亥年いの厄を炎に燃やす

藤原ミツ子

君は今余命二ヶ月死の床で夢に向かつて生きたいと言う

若林 幸子

……………題詠……………

あすは告知をされるだろう眼裏に細き筋見ゆいのちの道の

市川登美榮

風に乗りいちよう散りくる並木路に朝の陽こぼれ光り乱舞す
石手寺ゆ松山道後の「坊ちゃん湯」顎まで沈む遍路の夕べ

入江 洋子
岸原 修

黄昏るる山を望みて口にする昔習った道程の詩

玉井 秀男

ダイケアの体験無料の旗揺れて卒寿のわれを誘うこの道

檜崎タツエ

遠雷の聞こゆる夕べ父母の墓への道を小走りに行く

藤本エツ子

紫苑色しおんいろのころろに帰る道長しわたしの気持ちには届かなかつた

松本千恵乃

書き続け夫に残さむ闘病記十年を経て道ひとつ成る

三好 礼子

佐賀県

片肺の身となりおれど卒寿超ゆ余生も更に楽しく生きむ

井上 重利

長崎県

夜は唸るマナーモードの携帯が夫の軀とともに鳴り止む

田中 光子

「いち日に二頭産まれたよ」牛飼いの瘦せたる兄の今朝は明るき

長谷智香江

紅葉を待たず刈られし街路樹をシルエットにして月は昇り来

西 ふじ代

天の蓋こわれたように雨は降る蓋閉じませと祈る真夜中

村崎美智子

かりそめの宴のごとし夕映えのコスモスそよぐ丘を巡れば

山下久美子

一輪の浜寒菊を摘みて去る媪の背を夕陽が染めぬ

山田恵美子

……………題詠……………

黄葉のいちやうの道筋木の椅子は歳重ねたる者を寄らしむ

山下久美子

熊本県

アフガンの大地潤す大工事中村哲氏の無念の知らせ

有田 徹雄

新聞を配る里わのみかん園日々色付き丘染まりゆく

沖田須磨子

祖母送る孫の弔辞はぼつぼつと「勉強するよ」と約束しおり

田中 朝子

終活や羽織ることなく捨てんとす天鷲絨のコート妣に詫びつつ

田辺しげ子

項垂れてうなだれて佇つ一本の大向日葵のひと夏の果て

徳山久仁子

アキアカネ指先にまた止まりくる風の重さに似ていて軽し
……………題詠……………

戸塚あや子

花道をステップ踏みゆく団十郎睨の真似はなかなか難し

有田 徹雄

病む夫と対き合ふときは口角をあげてしばらく道化師になる

伊藤 裕子

二年後に農家の跡取り決めし子が道半ばにし心肺停止

岩城恵美子

人様の軒の上など構いなく野良は猫道ズシズシ行けり

戸塚あや子

大分県

幼き日暖とりしか大火鉢今もまだ在り灰にわが名書く

内山 淨子

夕暮れのほかし程なる明るさに車のライトキラリ刃を向く

太田美弥子

背にリュック左に手提げ右手では幼の手を引く若き母親

加藤 静子

翼もて猛暑の空を切り裂かむ子らを育む燕の如く

久保田嘉博

精いっぱい大声あげて助け呼ぶ自分の声に目覚め息つく

田中由岐子

通学路オハヨーの一言交わすため木影に吾れを待ちいし君は

寺司 愛子

野球帽を被りて案山子が眼なきペットボトルの顔で見てる

深蔵 一子

卒業の時先生に賜りし忘れ得ぬ詩はなお道しるべ

松本トシ子

……………題詠……………

迷いたる非日常から戻れぬと阿蘇の柚道キツネノカミソリ

伊東さゆり

うつつらと四国を望む晴れた日に思うは遙か巡礼の道

加藤 静子

右は彼岸左は此岸の道しるべ手にする童の案山子ある村

佐藤 信二

宮崎県

……………題詠……………

友の死を詠えずやがて一年忌共にのぼるや冬の日向路

西村 三智

夫逝きし後の道なき道を来て大きな杖となった子育て

日高 保代

鹿児島県

首里城の焼け落つる映像無残なり虚無の刃が胸をつらぬく

西園 屋恵

沖縄県

激痛に耐へつつ足をひきずりつつ主婦の役目をこなしゐる妻

亀谷 善一

立ち枯れる木にタニワタリ根を下ろす繰り返される森の営み

砂川 節子

炭色のこげのおいのただよいて首里の町に首里城燃えて

比嘉 道子

人生七十古来稀也と言われしをありがたきかな九十四の誕生日とは

與座 勇吉

NHK学園生涯学習フェスティバル
第6回誌上短歌大会
入選作品集

令和二年三月三日発行

編集発行 N H K 学 園

〒一八六―八〇〇一

東京都国立市富士見台一三六―二

電話〇四二―五七二―三二五二(代)

印刷 明誠企画株式会社

作品集の作成にあたっては、あきらかな誤字・脱字
以外は、原作のまま掲載いたしました。
誤植など不備な点がございましたらお許しください。
また落丁本はお取り替えいたします。

投稿と発表を楽しむコース 短歌友の会

- 8人の選者の中から希望の選者による選歌と直筆のアドバイス
- あなたの作った歌を作品集「彩歌」(年4回発行)で発表

短歌友の会選者

(50音順)
令和2年度



栗木京子



小池 光



三枝昂之



坂井修一



篠 弘



中川佐和子



花山多佳子



古谷智子



※各選者には定員があります。一定数を超えた場合、ご希望の選者の選が受けられない場合があります。

※受講期間1年(自動継続)作品提出/年間20首 選者直筆の朱が入った作品が戻ります。

実作力アップコース 短歌 表現のコツ

● 作品づくりに役立つ表現テクニックを3か月でマスター!

短歌の表現テクニックを身につけるとともに、今まで知らずに使っていた表現方法やより効果的な使い方を再認識することで、作品に磨きをかけることを目的としています。

学んだ表現テクニックは実際に使ってこそ意味があります。実作と並行しての受講をおすすめします。

- 実作者のために執筆されたオリジナルテキストです。
- 近現代の名歌を例に、短歌を作るうえで知っておきたい表現、取り入れることで作品がキラリと輝く表現を中心に取りあげました。
- 提出するレポートは、テキスト内容を確認する練習問題と、学んだ表現を取り入れて作歌する課題もあり、すぐ実作につながります。

短歌講座コース一覧

お好きなコースから受講できます

コース名	受講期間	受講料
短歌 表現のコツ	3か月	21,380円
短歌 文法のツボ	3か月	*21,380円

※短歌講座の受講経験がある方は19,350円となります

コース名	受講期間	受講料
はじめての短歌	6か月	22,000円
入門	6か月	23,420円
実作	1年	28,510円
実作集中添削	1年	35,640円
友の会	1年	23,420円

NHK学園 第6回誌上短歌大会入選証他専用額・トロフィーのご案内

「第6回誌上短歌大会」ご入選おめでとうございます。ご入選の記念にいかがでしょうか。

《入選証》 1通 1,800円

- * A4判(297×80ミリ)でお届けします。
- * 切り離して短冊にすることが出来ます。
- * おおむね1か月でお届けします。

▼入選証

入選証を切り離して短冊掛けに入れた見本です。

①短冊掛け(青)

★作品は2行になります。ご指定のない場合は自動的に18字で折り返しますので、ご了承ください。

《専用額》

①短冊掛け(青)

材質は和紙、壁掛け用です。
1枚 1,700円(税・送料込)

②額(クラシックゴールド)

上品なデザインで卓上・壁掛け両用です。
1枚 2,700円(税・送料込)



《トロフィー》

作品をトロフィーにお彫りいたします。

1つ 14,000円(税・送料込)

- * 専用申込書をお送りください。郵便局からの払込票をお届けします。
- ご入金確認後からお作り始めます。お届けまでに1か月ほどかかります。



キ……リ……ト……リ……

令和2年 NHK学園 第6回誌上短歌大会 トロフィー専用申込書

ご住所 〒 _____

お名前 _____ 電話番号 _____

掲載P	選者名	賞名	作品(全文を記入してください)	数	金額

お申し込み方法 ①または②をお選び下さい。

①普通為替または定額小為替の場合

下の申込書に必要な事項を記入し、為替（郵便局で購入）を同封して、封書でお申し込みください。

※為替には、何も書かないで下さい。

②郵便振替の場合（払込取扱票そのものが申込書になります）

郵便局で取り扱っている払込取扱票の通信欄に（1）大会名、（2）作品の掲載ページと作品全文、（3）枚数、（4）選者名（希望の方のみ）、（5）賞名、また短冊掛け・専用額を希望の場合には（6）商品名、（7）数量を必ず明記してください。金額欄に合計金額を明記して、下記の口座へお振り込みください。

**入選証および専用額トロフィーの
申込先・連絡先**
 〒186-8001（住所記入不要）

 NHK学園教材サービス
 第6回誌上短歌大会入選証係
 TEL 042-572-3151（代）

← 切り取って
封書のあて名に
してください

<郵便振替の専用口座>

口座記号番号													
0	0	1	9	0	7			5	6	3	6	0	8
加入者名		NHK学園 教材サービス											

- ※ いったんお申し込みいただいた後のご返金はいたしかねますので、ご了承ください。
- ※ 郵便振替の場合、下の申込書及び振替払込受領証のご郵送は必要ありません。
- ※ 申込書にはお名前、ご住所、電話番号をお忘れのないようお願いいたします。

※ コピー可

為替専用

令和2年 NHK学園第6回誌上短歌大会

入選証および専用額申込書

名前	フリガナ	受講者番号											
住所	〒												
電話番号	-	-											

○入選証

掲載誌ページ	選者名 (希望の方のみ)	賞名	作品（全文を記入してください）	単価(1枚)	枚数	金額
				1,800円		
				1,800円		
				1,800円		

- ◆特選・秀作・佳作の作品には希望される方のみ、選者名が印字されます。
- ◆同じ歌を複数の選者から選ばれた場合は、選者別の発行（1選者1枚）になります。ご希望の選者名を明記してください。

○専用額 ※ 専用額には入選証は含まれません。

短冊掛け（青）	数量	1,700円×	枚	金額	
額・クラシックゴールド	数量	2,700円×	枚	金額	

合計金額 _____ 円 を為替で同封します。

※ 振り込みの場合は、この用紙のご郵送は必要ありません。

あなたの短歌を、全国の短歌仲間のみなさまと合同歌集として1冊にまとめてみませんか。

中川佐和子先生・松尾祥子先生 選歌・鑑賞文

第30集

合同歌集『さくら』

～はじめてでも安心!～

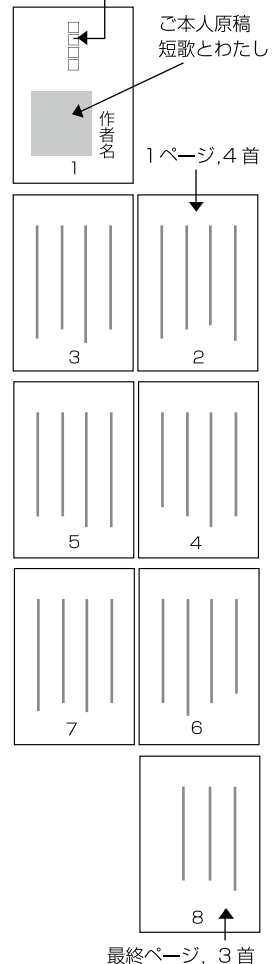


リポート・大会・スクーリングなどを通して、たくさんの作品がお手元におありのことでしょう。NHK学園短歌講座の中川佐和子先生・松尾祥子先生が選歌（一部添削を含む）。この中から1首の鑑賞文を配本時に別紙にてお付けいたします。また、ベテラン編集者がていねいに本づくりのお手伝いをさせていただきます。どうぞふるってご参加ください。お待ちしております。



装幀/菊地信義
発行/NHK学園

タイトル（題名）



応募要項

募集締切 令和2年4月30日

発行 令和2年8月初旬（予定）

◆作品について

おひとり40首お送りください。

27首に選歌し掲載いたします。

※鑑賞文は掲載せず、応募者個別に完成後別紙にてお渡します。

参加応募用紙をお送りいたしますので、下記あてにご請求ください。

※すでに発表された作品でも結構です。

◆合同歌集『さくら』の仕様

サイズ：四六判（たて18.8×よこ12.8cm）

製本：上製本（ハードカバー）カバー付

お一人様：8ページ 1ページに4首掲載

◆参加費用 おひとり76,000円（全経費・税込）

- 掲載された合同歌集『さくら』第30集 20冊配本（追加の場合は1冊2,000円になります。）

参加応募用紙をお送りいたします。参加ご希望の方は下記へご請求ください。

教材サービス『さくら』係 TEL 042-572-3151（代）

NHK学園 〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2 FAX 042-572-0061

あなたの作品を 「本」にまとめてみませんか

NHK学園では、自費出版のお手伝いをしています。

美しく装丁されたあなただけの句集・歌集は、一生の思い出です。あなたの人生の軌跡を、家族や友人、身近な大切な人へ伝えられます。

表紙を好きなデザインや写真で飾り、講師の解説文も入れて…最高の一冊を作りましょう。

出版にあたっては学園講師や編集スタッフがアドバイス、全力でサポートします。

出版費用は応相談。人生の記念として納得のいく一冊を作りたい場合、皆さまのこだわりやかなえない内容によって費用は本当にさまざまです。ご予算・ご希望をお聞かせください。

お一人一時間の「個別相談会」も各地会場で実施中です。(参加費無料・要予約)ご都合がつかない方、ご来場が難しい方は、お電話やお手紙・FAXでのご相談も随時承っています。

自費出版された方の句集・歌集の例 (一部抜粋)



句集「牡丹咲く」(中画)



句集 歌集



第二歌集「海のない町」(中画)

2020年 NHK学園 自費出版個別相談会

参加費無料

事前予約制

開催日	開催地	会場
3月13日(金)	名古屋	名古屋会議室 名古屋駅前店 (JR名古屋駅より約500m)
4月3日(金)	市ヶ谷(東京)	アルカディア市ヶ谷(私学会館) (JR中央線 市ヶ谷駅より約150m)
5月22日(金)	博多(福岡)	リファレンスはかた近代ビル (JR博多駅 筑紫口より約300m)
9月4日(金)	市ヶ谷(東京)	アルカディア市ヶ谷(私学会館) (JR中央線 市ヶ谷駅より約150m)
10月16日(金)	大阪	イオンコンパス大阪駅前会議室 (JR大阪駅 南口より約450m)

時間枠(先着順) ①10:30~11:30 ②11:30~12:30 ③13:30~14:30 ④14:30~15:30

※参加希望の開催日、開催地、時間枠とともにお名前、お電話番号、ご住所を下記あてご一報ください。追って担当より詳細についてご案内いたします。

※原稿をお持ちで、相談会へのご来訪が難しい方はご連絡ください。状況によってはこちらからお伺いします。

※NHK学園国立本校(東京・国立市)では常時、個別のご相談を承っております。(要予約)

お問合せ



NHK学園 自費出版編集部 ☎042-572-3151(代)

FAX 042-572-0061

〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2

令和2年度 生涯学習フェスティバル 短歌大会

下記のように開催を予定しております。みなさまのご参加をお待ちしています。

大会名称(案)	開催(発表)予定日	投稿締切	題	会場
伊香保短歌大会	6月1日(月)	3月19日(木)	人	伊香保温泉 ホテル天坊
誌上短歌大会	8月5日(水)	5月12日(火)	和	————
誌上短歌大会	11月5日(木)	8月14日(金)	本	————
武蔵野市短歌大会	令和3年 3月20日(土)	12月18日(金)	光	武蔵野市民文化会館

生涯学習フェスティバル短歌大会のご案内

全国各地や誌上での短歌大会を開催しています。どなたでもご参加いただけます。

規定の投稿用紙(コピー可)をお使い下さい。

ひとり何組でも、どなたでも応募できます。(自由題一首または自由題一首+題詠一首)

◆**題詠** ※題詠は必ず指定の文字を入れてください。

※題詠のみの応募はできません。

◆**未発表の自作に限りません。**(作者本人からの投稿に限りません)

◆**二重投稿は固くお断りいたします。**

◆**投稿後の作品訂正、さしかえはできません。**

◆**同一作品、酷似作品が先行して発表されていた場合、入選・入賞を辞退していただくことがあります。**

投稿料

①自由題一首の場合 二、〇〇〇円

②自由題一首と題詠一首の場合 二、八〇〇円

それぞれ、一冊の入選作品集代を含みます。

◆**送金方法**

郵便払込、現金書留、郵便為替(定額小為替、

普通為替を郵便局で購入)のいずれかをご利用

ください。(切手の代用は不可)

郵便払込をご利用の場合

郵便局においてある、郵便払込取扱票の通信欄

に大会名、組数と投稿料をご記入の上、払込み

ください。受領書のコピーを「のりづけ」欄に

貼り付けて、ご応募ください。

口座番号…00180-2-357944

加入者名…NHK学園短歌大会事務局

賞・発表

◆**大会大賞**(文部科学大臣賞の候補作品となりま
す)、市長賞、選者特選・秀作・佳作・入選な
ど。

◆**入選上位内定者**には事前に文書でお知らせしま
す。

投稿された方には当日会場で入選作品集をお渡
しします。(誌上大会を除く)

会場参加されない方には、大会終了後に郵送し
ます。

◆**入選・入賞作品**は、NHKとNHK学園で使用
させていただきます。

伊香保短歌大会

群馬県渋川市

今回で19回目となる恒例の大会です。

まだお越しでない方はぜひご参加下さい。

◆ 投稿募集

自由題のほかに、題詠は「人」

題詠は「人」の漢字を必ず入れてください。

◆ 投稿締切 令和2年3月19日(木)

消印有効

● 日時 令和2年6月1日(月)

午後一時～四時

● 会場 伊香保温泉 ホテル天坊

● 選者 三枝昂之・古谷智子

松村正直・松尾祥子

主催 NHK学園・

(二社)渋川伊香保温泉観光協会

後援 NHK前橋放送局ほか

◆ 当日詠募集 (無料)

題「伊香保の夏を詠む」

当日、会場で自作一首をお出し下さい。

入賞作品は会場にて発表いたします。

◆ 伊香保短歌大会へのご参加をお待ちしています。



伊香保の町

伊香保温泉
石歌碑めぐり

伊香保の名は今でこそ、ここ伊香保の町名として残っているだけですが、万葉の時代には今の榛名山一帯を指していたようで、「万葉集」巻14の東歌の中、上野国(群馬県)の部には「伊香保」に関する歌が25首中9首詠まれています。

- 1 森林公園管理棟前
- 2 長峰公園(池の前)
- 3 文学の小径
- 4 ロープウェイ見晴駅東
- 5 湯元飲泉所横
- 6 伊香保神社境内
- 7 観山荘西側

多彩な魅力に満ちた、

伊香保の温泉情緒

湯がでたのは、かれこれ二千年も前の話。長い歴史を持つ群馬県伊香保温泉の町並みは、名所石段街を中心に、昔ながらの素朴な温泉情緒でいっぱいです。石段をのぼり切った湯元温泉地横に、こじんまりとした佇まいながら開放感いっぱい露天然風呂が広がります。伊香保の湯は昔から子宝の湯として知られ、温度は43～45度、茶褐色でまろやかな湯質が特徴です。



石段街



10 水沢寺駐車場

い香保ろの八坂の埋塞に立つ虹の顕ろまでもさ寝をさ寝ては



11 万葉植物園

水沢寺駐車場の東端、道路沿いの柳の木の下にある。町で建てたものとは別個のもので、桐生市の医師・森田丈夫氏が昭和五十八年に建立奉納したものである。背丈程の岩塊にはめ込まれた虹形の研磨石の歌碑。本碑の右裏の、四枚の銅板を和洋両文で説明が追加されている。

8 峠三差路

い香保せよ なかなかしげに思いどろくまこそしつと 忘れせなふも

伊香保にいる背背の君よ、あなたは、この頃私のところのなかなかし(仲子「妹」)に、大変な思いをかけたいなさるようすが私は、何時かあなたと一緒に寝たことがある。このことは決して忘れないですからね……くやしい。

9 水沢寺境内

い香保嶺に 雷な鳴りそね吾が上には 故はなけども 兎らによりてぞ

いかほの山から発生する雷様よ怖い音をして鳴らないでおくれ俺には何のことはないのだけれど俺が好きなの子が怖がるから……。

伊香保短歌大会投稿用紙

投稿締切 令和2年3月19日(木)消印有効

〒186-8001

東京都国立市富士見台2-36-2

NHK学園 伊香保短歌大会事務局

▲ご投稿には、点線を切り宛先として貼ると便利です。

名前	フリガナ _____ (男・女) _____ (歳)
作品集に掲載するお名前	フリガナ _____ (本名と違う場合のみご記入ください)
住所	〒 _____ _____ 都道府県 _____
電話番号	_____ - _____ - _____
生年月日	大正・昭和・平成 _____ 年 _____ 月 _____ 日 ※任意でご記入ください。

「投稿用紙」に記載された個人情報は、今大会の運営に使用するほか、NHK学園の短歌大会、通信講座のご案内に使用させていただく場合があります。それ以外の用途による使用は一切いたしません。

大会当日会場に	参加する (会場参加は無料)	参加しない
---------	-------------------	-------

※印がない場合は、不参加とさせていただきます。
 ※入場券は、複数組投稿の場合も投稿者1名につき、1枚(2名様入場可)発行です。投稿せずに会場参加をご希望の方は、往復はがきで別途お申込みください。

歌の雑音(ズエキ音圏記入)

！もう一度ご確認ください
 ●未発表・自作に間違いありませんか
 ●誤字脱字はありませんか ●二重投稿(同一作品を他へ投稿)していませんか

●作品の控えをお手元に残してください
 ●作品投稿後の訂正には応じられませんので、ご了承ください。

東京都	作品集に掲載するお名前	フリガナ _____
-----	-------------	------------

歌の雑音(ズエキ音圏記入)

自由題

題「人」(希望者のみ) 「人」の漢字を必ず入れてください。

※題詠のみの投稿はできません。
